川柳核

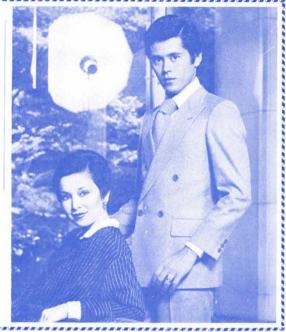


No. 641

55年度二賞発表

十月号

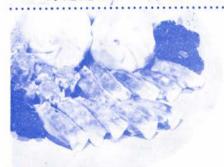
気どったカッコウはきらいだ、 思いのままに 熟い心を満たす





株式会社オーエスケー

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



豚饅・焼餃子

焼売・叉焼

义焼饅





TEL (641) 0551

(支店・出張店)

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋 中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドージマ地下支店 ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア 南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)

悲 無 倦

上げた時期もあったが、 のお句から、相つぐご不幸を遙かにご心配申 団へくるまるか』とか『孤月の下に孤独が帰 塔に投句して居られるが、 を亡妻へ買ってくる。 『みな忘れさせて枕はありがたし』とか 又『まるめろのかを 『誰よりも喜ぶ人は

振りに再会の機会を得た。 割いて頂き慰安の席を設けた。 延暦寺へと参詣の途中、貴重な日程の 要を修するために、 藤甲吉氏がお母さんと奥さんの年回忌法 青森をたって永平寺 お蔭で十五年

釈

迦

0

掌

12

抱

か

n

7

輝

1

甲

吉

0)

瞳

男

0

涙

71

た

む

き

t

年

忌

٤

Vi

う

雲

間

13

恋

妻

恋

L

永

1/

寺

班

暦

寺

0

甲吉氏は毎月川柳 『蓑虫のように蒲 一夕を 中に幾分でもゆとりのある心持ちを持って頂 活を祈っている。合掌 大悲無倦常照我の教えに甘えた光明の生

嬉しく思ったことである。 にお目にかかっても一層そんな感じをうけて ると何となく明るさを感じることが出来て来 地下にいる』 つきり光背を拝んだ気持がした。こんど久々 の句に達せられた甲吉氏の人間像に、 殊に『土壇場に来て釈迦の掌の中と知る といった句を拝見するようにな つきつめた生活の 私はは

+ Ŧi. 年 振 1) 再 会 1 吉氏に献

脸

di 0 40 底 3 0 13 3 光 や E る H 再 吉 会 0) 涙 + 津 Ŧi. 軽 弁 年

中 島生々

III 柳 塔 +月 号



した中の文から抜いて返事をしておいた。 き、そして最近ある書道の先生の著書を手に しょうか。どんな句が佳作になるのでしょう たかわかりません。どんなに作ればよいので 投句をやめようか、川柳を捨てようかと思っ リントさえ手にしたことがありません。 ません。NHKから景品を貰ったり、 毎月投句しているが一回も抜けたことがあり てこられたのです。それで私の考えを少し書 か」というような意味の手紙を直接私に送っ プリントを頂いている人があるのに、 その文というのは次の一章である。 先日北海道のB氏から「私はこの一年 私はブ 何度

爱染

夫は路郎賞

・妻は川柳塔賞

正

朗・芳 杉

了 :

高 橘

40 44 47 31 22 32

風

選

藤甲吉氏歓迎会

秀句

鑑賞 帖

> 水煙抄) 同人吟)

君子・夕花・智子……阿 部 柳 太…

水煙抄

Ш

柳

塔

同

人作品

受け身

JII

郎

2 1

生々

庵

風柳多留廿五篇研究 ……… (三二丁)

紀内恒久・鈴木

黄・室山三柳・故岡B博美・八木敬一・西原

H

亮·青木迷朗 甫

中島生

一々庵

選

4

菊沢小松園選

大悲無倦

JII

目

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

誹

横

并

也有と柄井川柳

川柳太平記四)

東

受 け 身

JII 村 好 郎

NHKラジオ川柳の選評は遠く中島生々庵

そのあと平

毎月ベテラン、新人を含めて約二千

The Total	飛びついてからをどうする青蛙	精一杯生きた枯葉に心置く座右の句	**	編集後記	新	7.7	各地柳壇(佳句地10選)	本社九月句会	柳界展望	大萬川柳「甘 い」	初歩教室	雅号ぶっちゃけばなし	一分間の柳論	床上伝習川柳記	エチケット
			A	_	山 7	5 西	斎	:		Щ		石	出	東	西
	桑			= *	111	川川		庸佑・		村	田士	川	原	野	尾
36	田	好	1	(一三夫・葉子)	阿莎	兄 充 病 素 紫	斎藤三十四	整	į	好郎	恵二		敬	大	
1	静	郎	**			明光	選	整理		選	一朗	洞	_	Л	栞
	子,		*	:		: :	:	:	į	:	•	i	:	:	:
)	67	49 4	18 48	59	55	54	52	50	65	30	57	51
C															

柔道の基本は受身。

26

55年度路郎賞·川柳塔賞発表......

受身とは投げ飛ばされる練習、人の前でころ受身とは投げ飛ばされる練習、人の前でころ

それが受身です。

素直にころぶことを教える、いさぎよく負け素直にころぶことを教える、いさぎよく負けることを教える。

てもすぐ立ち直る。それが受け身の極意。その代り、ころんでもすぐ起き上がる。負け

失敗を気にするな。

せ我慢などすることではない。 直に叫ぶがいい。弁解なんか一切するな。や 直に叫ぶがいい。弁解なんか一切するな。や

その代り、スカッと泣いてケロリと止めるんだ。早くから勝つことを覚えるな。受け身さだ。早くから勝つことを覚えるな。受け身さることが出来るから………。 受け身の修業、柔道だけだろうか、書道だけだろうか。川柳の道にも相通ずるものがあると思える。



中 々

丸顔に生れて悩まぬ人とされ 掃溜めの鶴がもってる謎の影 核協定メッキのペンでサインする お茶一ぷく飲めばなんでもない話ためらいが運命の鍵握ってた 変骨とは当人一寸も思ってず とっときの 粒ずつ磨いて繋ぐ胸飾り すぐな背すじが支えているこころ 切り札持っているゆとり 大阪市 111 本 間 弘、 満 津 子 生. 本 肩書きのない気 気どってもコバルトコ

安さの

紙

15

.7

グ

バ

ル

1

の照射・

音

 \mathbb{H}

抽

方

大

t 天 0 に捲かれて何時もの陽 天寿の V 0 ち Vi ただかん 111 が昇 西市 3 戸 古 方 雑談 帰れとは云わ 仏壇 戦 辞める汐時を他人が知ってい 長男の進路を変える訃報着く 先代の写真が怖い社長室 弁当の大きさ汗が食べ 争を憎むこころも風化する 物 の中で盗まれてたヒント は掃除し 0 ようだに造花自信 にく x2 が時計ばかり見る VY 太い指 ている 持 0 る 金 井 文

優ボも

クの

悟

i)

へ妻ゲラゲラと哄うなり

ーテンモルゲン今朝蟬がなき鳩雅な入院百枚も絵が描けて

が翔

.::

運の良

い仔犬パン屋に拾われる

リフォームとも知らずどこで買わはっニューモード孫がセンスをほめてくれ

た

宝塚市

傍

島

静

馬

長

秋

中国の花火十円らしく鳴り 大田市 大田市 大田市 大田市 大田市 大田市 大田市 大田市 大田市 大田市	日も亦逃げれても又夢れても又夢	選よてきた仔猫住みつく戻り梅雨 地球よりも軽いいのちが多過ぎる 夕焼が映えて浄土の湖となる はなやかな中に愁いもねぶた笛	整形の顔に易者気付かない 少うし待っただけの吸殻多過ぎる 少うし待っただけの吸殻多過ぎる ア国へ予約切符がまだとれず ア国へ予約切符がまだとれず に崎市 での艶
藤	欄	工	黒
Щ		藤	Л
軒太		甲	紫
楼	蘭	吉	香
だラマよりわ おっぱい おっぱい おっぱい はみじみと から はみじみと 傘が 成	まびやかっ がやっ涼 る。	借 愛という 高 気 圧 薬 の 説 形 薬 変 脱 り ツ	入相有見本 れ談のよこ
マよりわが亡母こそは聖母なり切れの節は御容赦売れ残りとみと傘寿が親の恩を追うじみと傘寿が親の恩を追うにみと傘寿が親の恩を追う	せた地鮎の皿せたい人を待れば欠くるこ	げ字 聯んにない 出知 知から	恵 タ う で 書 が と コ 無 し
が亡母こそは聖が亡母こそは聖と孫が理	せた地鮎の皿をせた地鮎の皿をせた地鮎の皿を	ドば自前の汗が出る 学が出来てからの嘘 いなられば忘れられ	島根県 あるというから逆ら るといよいよ毎どら ようである序列 テーブル掛焼かれ うそれから後が出ず
が亡母こそは聖母なり は御容赦売れ残り は御容赦売れ残り 歩で礼に来る皮肉 鳥取県	大婦だけの夏 大婦だけの夏 大婦だけの夏 大婦だけの夏 大婦だけの夏 大婦だけの夏	にならねば忘れられ いでから行く盆踊り が出来てからの嘘 が出来てからの嘘 が出来でなし	島根県 あるというから逆らえ るといよいよ侮どられ ようである序列 テーブル掛焼かれ テーブル掛焼が出ず
が亡母こそは聖母なり が亡母こそは聖母なり 場取県 鈴	大婦だけの夏 大婦だけの夏 大婦だけの夏 大婦だけの夏 大婦だけの夏 大婦だけの夏	にならねば忘れられ にならねば忘れられ 字が出来てからの嘘 学が出来てからの嘘	島根県 小あるというから逆らえずるといよいよ毎どられようである序列 テーブル掛焼かれ

私 余叱麻 もう一 それ 神 贴 U 仲 人真に 青 他愛ない 7 倖 るの に似た孫の性格案じ出し 婚論苦労してみる気などなく 染めてさて顔 命表月日は容 痺 さまに り替えてふたりで住めぬ紙 とり残されて冷蔵庫が減 イヌ踊らせて拍 直 0 心 1 スダレこの 0) ++ ひらの 0 なりに酒 を包んでくれ の影絵を失うま りさせて屋台 眼にふれ 40 北海道 か泣 子 度大志を抱 程 43 が母朝 黒地 男と思て酒を酌ぐ ま 6 Ŀ す を貰 7 ちゃん私も走りたい たが虫の不運なり 家 の力のかくし芸 0 借 の自由をもてあそぶ 何 0 赦 似 いるのか母 の平和透けて見え り着で嫁 皺どうしよう なく きに 0 合う 0 手の哀しさよ た新聞紙 た顔 6 灯をおとす 、過ぎる とす 北 未亡人 で起 の旅 13 らぬ だがが 便 1) 3 障 和 倉敷市 米子市 堺 子 市 T 高 稲 八 高 橋 木 橋 操 曲 T T. 一万子 子 作 代 病室 砂 明 馬忘 席蹴 付き添 L to 何 雑 ち 譲 器用さを買われてい 働 入院の妻へみくじを引く弱気 入院の若しや若しやを打ち払 入院の妻から金の在りどころ 病 親 絵心をゆさぶり É ジャー H 7 耳 0 6 糖壺見つけて蟻は横見せず たく 12 草 か 足袋 す 0 誓う たい ぼけ で命 ない ×2 東風今日も阿呆になって暮れ って帰る勇気がまだ足らず れて気兼ねの要らぬ年に 妻 43 0 る限 執 E しがわたしに て 年 いも滅入って黙る梅雨つづ 夫婦 な趣 拾 -金幕 帰 星 傷を意識 笑顔 念生き抜くことに H) 空がない都会の 60 1) 植 を じに でいつもよく笑う は 味の会さえ反主 絶やさす を果してホ 木は 軽 夕日 帰 1 ののぼり坂 する気兼 る村 聞 耐えてい 挑 つも損ば 油 む Ħ 1 1 時 落 40 1) ッとする ひとり 夜 面寸 ta か 0 た なり ž 流 かり +1 41 大阪市 岡 H 山県 取 昭 E 市 r) 神 嘉 豳 夏 磯 数 谷 村 道 T 3/ 代香

朗

子

	いつ逢えるテープほろりと波に消え ト情のロマンたずねる隠岐も過疎 自然美の景観舟酔いしておれず 自然美の景観舟酔いしておれず 高根県	手毬つく恋の娘になりきれず 大の若さこちらはバネがない 家元の若さこちらはバネがない を対するといってはない家族	新聞を持って等に掃き出され りにははっきり昨日のことは呆け を関じて悲しいことは消してゆく を関じて悲しいことは消してゆく	やりくりの休暇を母と泣く映画
平	藤		三	月
田	井		井	原
実	明		西华	宵
男	朗		夢	明
を 対立っと音しそうに夕日が海へ落ち 大阪市 を 対ので で を が家の灯の茶漬 が家の灯の茶漬 がまの が家の灯の茶漬	出るり	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	びたいと思う女は批判され出する友へ讃歌の陽が昇る出する友へ讃歌の陽が昇るのよい証拠の喧嘩と羨やま	締りをしなかった非を刑事
本	植	遠	恒	榊
多	Ш	Ш	松	原
柳	武	п	пТ	秀

住

志

助

紅

子

大阪市	留守番へ納得できぬ音ひとつ 正座しても感の鈍さをごまかせぬ 正座しても感の鈍さをごまかせぬ	ぬ傷の痛みよ夫婦でも島根	ビヤガーデン喜しい夫の手を引いてひとときを温めてみても夢は夢ひとときを温めてみても夢は夢をかれねばならぬ長さも考える	熱風をかき廻してる通勤車梅雨空を眺めて泣く人笑う人	のペアレビール、 ・ 持っていた。 ・ 大嫌いなそうめん届けられ ・ りがもたれかかるよ汗の肌 ・ りがもたれかかるよ汗の肌 ・ といった。 ・ といた	ボ 中 吟 家 中 吟 下メリカの世論にゆれる第九条 アメリカの世論にゆれる第九条 平和公園ああ反戦の鐘が鳴る
河		堀		堀	室	れ
野		江	si	I	谷	
君		正		芳	徹	
子		朗	ļģ	子·	护	
冬ものへ尾を引く冷夏後遺症	大阪市 大田のためせめて煙草はやめません 国のためせめて煙草はやめません ではないないではないません。 大阪市 大田のためせのでは、大阪市 大阪市 大阪市 大田のためせのでは、	よ「戦争」展でまだ会えぬ	まれば図太く一固はお人よめから本音ぶっつけ合う出めから本音ぶっつけ合う出も足も口も堪えてた任しき	東の間の歓喜でもよし我れ勝てり 観世音在わす谷汲蟬しぐれ 和歌山市 野	歳はとうに過ぎ った雨宿り きの勘狂う	大阪市 西野川の東京の 大阪市 西野川の 大阪市 西野に、 でいる とりに 妥協ぐせがある までは、 でいる とりに 妥協ぐせがある までは、 でいる とりに 妥協ぐせがある
	坂	杉		村		Щ
	形	鬼		太茂津		善

七彩のネオンで育つ花もある 大見せる女団地の朝歩く 鴨川の床はんなりと風が吹く 鴨川の床はんなりと風が吹く 鴨川の床はんなりと風が吹く 幡かると店の空気も明るうて はかると店の空気も明るうて	クタイを少しゆるめ時計が止ってくれぬ 尾だけつかんで放さ	紫陽花め多羅尾伴内真似て見せちり紙にされぬ努力を忘れまいちり紙にされぬ努力を忘れまいまにはたい。	もう一つの顔も無念! 消して行く一応は鍼も電気もしてみたが 大阪市ペンペン草に幕	売り場を茶飲み友達らし異変受取り手形長くなる
中	若岩岩		不	
村	柳本		田	
ゆき	潮		三夫	
きを	花子		夫	
日紅を落として暮す日何時のこと 別れずに耐えて幸福握りしめ 女です心の春風無くすまい 富田林市 岩 部刀のような言葉で褒められる 関刀のような言葉で褒められる おいっさい忘れる日があって良し はくそうな夫婦が降りた雨の駅 おりていまれる日があって良し	でいい兄だが刑事として 帯夜仕事もすこし行き詰 で大婦だから で大婦だから で大婦だから	は 山門を出ると寺歴はもう忘れ は は は は は は は は は は は は は	様に会いたい	真八枚ここに潰瘍うつ
H	井	出]]]	J11 2014
美	春	素身郎	滋	酔
代	日	因	雀	々

竹原市	盆提灯冥土の噂もって来る	慶弔の電話耳から身構える	政治家は右へならって石となる	神にだけ過去を明かした死刑囚	島根県	定年の庄助ばかりで過ごす日々	口よりも能弁なるか指話の指	ノーモア靖国英霊も言うてはる	無理はもうせんときなはれと万歩計	神戸市	悔少し残して今日の灯り消す	言い過ぎも言い足らぬにも残る悔	むき出しの厚意に火傷しそうなり	冷奴でもよし老いの誕生日	守口市	地球儀の日本魂孫に指す	健やかという幸せに気が付かず	原爆忌平和の鈴は手の中に	幸せは何事も無し無事という	和歌山市	俺と妻振子時計と老三人	イヤリングもう一流の歌手気どり	小鳥哀れ籠に産れて籠に死す	的確な予報賞めつつ雨に泣く	出雲市
小、					大					仲					野					垂					原
島					野					1.0					呂					井					
蘭					酔					どんたく					右					千丰					独
幸					夢					<					近					寿子					仙
お隣の朝顔ばかり花が咲き	寝屋川市	新風を吹き込む嫁のいい意見	石地蔵とんぼの群へ肩を貸し	胃袋の色をピンクにして暮し	分け合うた悩み友情と云う強み	米子市	雨降りの予報のように痛む傷	夏祭浴衣と下駄の好きな父	校庭の騒音ベルに吸いこまれ	送別会主賓としての度を過ごし	京都府	カネ落したつもりで振舞う祝い酒	わたくしの罪とは言わず女泣く	ふかし芋の土産をバスに忘れて来	飛球追う観覧席の百面相	京都市	耳だけは肥えて声出ぬ小唄なり	気象まで人につき合い異常なり	浴衣にもブラジャーはなさぬ現代娘	母に似て浴衣姿の美しさ	大阪市	ぎりぎりにならねば散髪へも行かぬ	蜻蛉 蝶 蟬 命がここにある軽さ	手と手つなげば熟睡出来るかも夫婦	金魚ゆらゆらひとりぽっちは退屈だ
	宮					林					間					Щ					Щ				
	尾										嶋					本					Ш				
	あい					瑞					青丹					規不					[11]				
	き					枝					刀子					小風					茶				

隠岐観光	島根県	手助けは無用と車椅子も意地	満足な五体が不満ばかり云い	有るように見えたか秘訣など聞かれ	やり直しきけばやりたい事ばかり	東大阪市	ハンコ変えても幸せ来てくれず	送り火は引き止め度くて遅らせる	魂祭り亡夫の好物皆供え	三回忌すんでも夫の名で来る便り	東大阪市	類が類を呼ぶ夏蟬の大合唱	これが浄土の色とも蓮ひらく	植物園「蓮池」にて(一句)	大輪の見事王朝の色で咲き	しだれ朝顔そんなのもあり朝顔展	京都市	白足袋の感触あほうになり踊れ	一件落着喧嘩別れになりにけり	小商いに出る日の妻のうす化粧	生者必滅名簿に引く朱線	竹原市	嘘をつく私と嘘を聞く私	て起きて食べるそれでも日	入れ知恵と思わす程にませた口
	錦					萩					竹						松					Щ			
	織					尾					中						Ш					内			
	文					真佐志					綾						杜					静			
	子					述志					珠						的					水			
善人		減	κΦ	i for	金			1.6		0213		1.5	72				65		1000	tion!		1120		n/a	人
人の小さな嘘は信じられ	奈良市	反の続く村にも祭り来る	ゆえあって聖書をめくる手が重い	海女陸に上ると男臭くなる	並で済む噂心が許さない	呉 市	セールスのノルマ夕日とかけくらべ	嫁が来てやっと戻ったこの笑顔	ワンテンポおいて気付いた洒落言葉	戦線の夕日に祈る癖続く	岸和田市	稲の穂の軽さをなぶる秋の風	我儘な太陽季節に従わず	ここからは民宿建てさせぬ鎮守さま	ただ墓の守りするだけの過疎の寺	京都市	泣き言の様だが内容は自慢	肩書はいつでも捨てる人間味	日本語の教師を困らせる草書	同情をして善人は引き下がる		借景の青さへ巨船浮いたまま	伝説の島へ歴史が溶けている	0	八情の豊かさ島の灯は消えず
の小さな嘘は信じられ	奈良市 宮	続く村にも祭り来る		海女陸に上ると男臭くなる	並で済む噂心が許さない	呉市 林	セールスのノルマ夕日とかけくらべ	嫁が来てやっと戻ったこの笑顔	言	戦線の夕日に祈る癖続く	岸和田市 狭	の穂の軽さをなぶる秋の	な太陽季節に従	ここからは民宿建てさせぬ鎮守さま	の守りするだけの過疎	京都市都	の様だが内容は自	肩書はいつでも捨てる人間味	本語の教師	情をして善人は引き下		の青さへ巨船浮いたまま	0	0	情の豊かさ島の灯は消
の小さな嘘は信じられ		続く村にも祭り来る		海女陸に上ると男臭くなる	並で済む噂心が許さない		セールスのノルマ夕日とかけくらべ	嫁が来てやっと戻ったこの笑顔	言	戦線の夕日に祈る癖続く	市	の穂の軽さをなぶる秋の	な太陽季節に従	ここからは民宿建てさせぬ鎮守さま	の守りするだけの過疎		の様だが内容は自	肩書はいつでも捨てる人間味	本語の教師	情をして善人は引き下	新宮市	の青さへ巨船浮いたまま	0	0	情の豊かさ島の灯は消
の小さな嘘は信じられ	宮	続く村にも祭り来る		毋女陸に上ると男臭くなる	並で済む噂心が許さない	林	セールスのノルマ夕日とかけくらべ	嫁が来てやっと戻ったこの笑顔	言	戦線の夕日に祈る癖続く	市狭	の穂の軽さをなぶる秋の風	な太陽季節に従	ここからは民宿建てさせぬ鎮守さま	の守りするだけの過疎	都	の様だが内容は自	肩書はいつでも捨てる人間味	本語の教師	情をして善人は引き下	新宮市 大	の青さへ巨船浮いたまま	0	0	情の豊かさ島の灯は消

洗う背に再婚を聞きながし い言葉さらりと女の城守る い言葉さらりと女の城守る 大阪市 とがしもならずやもめの独り言 大阪市	信じたい心が手紙又読ませ 信じたい心が手紙又読ませ 信じたい心が手紙又読ませ 信じたい心が手紙又読ませ 信じたい心が手紙又読ませ	原商ちる	出嫌いになって退職後の日課 出嫌いになって退職後の日課 ときめきがまだあり女お洒落する やりくりのリフォーム着せたり脱がせたり をきめきがまだあり女お洒落する やりくりのリフォーム着せたり脱がせたり
江	木		
城	村本		芝
修	は じ め 子		としよ
り向けば矢張り見ていた里 り向けば矢張り見ていた里 歴を過信不満をためている 歴を過信不満をためている	子 姉妹も五十坂から気か揃い 痛さより金の辛さで行く歯医者 痛さより金の辛さで行く歯医者 句を練れば心に音が生きてくる 松江市 かんしょり かんしょう はいいん はいいん はいいん はいいん はいいん はいいん はいいん はいい	母のない子が砂山の夢を点滴へ文句をつける回復点滴へ文句をつける回復	生きる汗生きる証しの夏の貌 ゆきずりのうすい情をあたためる ゆきずりのうすい情をあたためる 夏バテせず土用丑の日忘れさせ 亡き母と百度を踏んだ石畳 金の件は都合ついたでまた苦労
安平次	竹	北越	太
	内	野智	Ш
弘、	寿	久 一	亀
道	美	子 水	甲

の注意思い出しては踏むペダル情なくボタン一つで開く傘福山市情を差し掛け共に濡らす肩っている。	財雨読どころか二度目の職につきび捨てはもうできない子の背丈が捨てはもうできない子の背丈日葵が庭をアンバランスにして開く日葵が庭をアンバランスにして開く	v, 9 C	藤井寺市 思恵ながだまって判こ押してくれ 悪友がだまって判こ押してくれ 悪友がだまって判こ押してくれ まり か郷が一緒夜汽車の友となり	リンチにも似て山肌が削られる リンポリを人格円満とは平和 ノンポリを人格円満とは平和	i i
桑田	小林		児 島	植村芽	5.0
静	孤呂二		与 呂 志	客遊子 犬	T
樹の下の鹿もぐったり蟬しぐれ を魚池逃げた金魚の不幸せ を生めきが送り火ひとつひとつつけ	奈良県 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	ベンガル湾少し泳いだ敗戦記食うだけは浮かせておいて倒産しひぐらしに呼び止められた山の宿	ひぐらしの声に林が少し揺れ政治にも紫頭巾でてほしい頭い犬も間違えるほど黒く焼け	長居する客へあくびで暗示する 要世帯訪えばさびしきものを食べ 男世帯訪えばさびしきものを食べ ※子市 米子市	与り半上吾なこ己) な旨り汝岡山県
福	村	栂	岸	小	出
H	Ŀ.	4	本	西	原
丁	春	ک	無	雄	敬
路	巳	1)	人	Q	-

撃の巣を真似して出来た冷蔵庫 地獄絵と同じ政界野心の図 検べかねているとの噂過疎へ来る 食べかねているとの噂過疎へ来る 奈良市	石地蔵雨に目ざめた顔で佇ち そ衣無縫矢印なんかいらぬ子等 天衣無縫矢印なんかいらぬ子等	老いらくの恋かも山のささやきは不老の水今日も変らぬ渓の音本トトギス鳴いてささやきドラマめきあたりないのであれた。	例えばの話急所へ近づける 明礼でまたはじまった社是社訓明礼でまたはじまった社是社訓上役の趣味重箱の隅をほり	天気晴朗畑は邪心の捨てどころ老いの坂気合いを入れて駆け登る老いの坂気合いを入れて駆け登る
森县	· 大	さ 有	松	
田里	予 原	į H	本	
カズ	文 薬	ا ک	忠	
エ 庫	重 香	! と ! : : : : : : : : : : : : : : : : : : :	=	
野妻の手綱ほどよく伸び縮み 野妻の手綱ほどよく伸び縮み 野妻の手綱ほどよく伸び縮み	び締み遅にいれて設計区と舌でうつわが喰べさす京涼夏よろこぶ人と泣くひと	の強い女房に無口の夫の強い女房に無口の夫の強い女房に無口の夫	カからない事が多くて古稀の秋 夕涼み妻来い孫来い犬も来い 大陽に向かぬ向日葵だってある	種子無しのぶどうへ老いの舌さびししのび逢うなんてムードがありすぎるあの頃は純情だった古日記
岩	西	北	Щ	津
井	村		村	H
本	早	勝	映	与
棒	苗	美	輝	史

見がのきれいな声を言者の 山の杉の高さにある太陽 山の杉の高さにある太陽	小原女のきれいな害も古都の打つつましく飾り人目を引く気品一匹の蝶も狂えば火に向う 西宮市	身寄りない老人鳩に取り巻かれ乗り降りにお気をつけてと母送る乗り降りにお気をつけてと母送る花火より好きなお方と手をつなぎ、	発展に尽くした老いを煙たがり 友情を無視する天秤だってあり もう錨おろす汐時知る空気 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	夏休み賑やかすぎる祖母の部屋夢も無く一人で下る女坂夢も無く一人で下る女坂	若者はいいなあ白い歯で笑うドス効いた声でサラ金から電話
上	藤	梅	石	行	Ċ
田	村	本	垣	天	ŧ
32	×	登美	花	Ŧ	•
光	女	也	子	11	
年目流行がは気が	情国参拝肩書ぶらさずで私人 省エネ時代行水のよさを見直され 省上ネ時代行水のよさを見直され 三途の河を抜き手を切って渡ったろ	仏間の母と一と刻語る里がえり私にもどる机に戻る雨の午後父に似し母に似しかな地蔵眉はすの花亡母のゆくえを知ってるネ	を境はそろりそろり桐の下駄 発肥れ通知簿の⑤も並べ がらばちかぶる があ破る富士山だからばちかぶる	下関市 大語症になって募情を断ち切ろう と言からは貴方を射程距離に置く ここからは貴方を射程距離に置く	院経釈迦が私に説くと聞く 和歌山
前	柳		高	玉	松
Щ	楽		橋	弘	原
北	鹤		タ	半休	寿
海	丸		花	門	子

についた答弁嘘の味が	胃半分取って喜寿の祝いする 東大阪市 高望みするなと医者に釘打たれ	考えてみれば僕だけの孫でなし眠られぬ夜ゴキブリと渡り合い	人間のブロイラー化にさむ毛立ち 生勢市	満は涙の	にんげんの重さに軋む車椅子エンピツで書くのが似合う自叙伝で	玉虫色に歳月光る母の櫛また一人音痴が増えてずれてくる	な き	透明な心に聞える石の声和歌山市を対するのは	っし、医しばひ - ト こ) いが日傘に代り雨上る - 本 え夏休み - で 大ジョッけを一気に飲み干す大ジョッけを一気に飲み干す大ジョッけを一気に飲み下す大ジョッ
	斎		草	天		ď	4	浦	清
	藤		深	正		Ц	1	野	里子
	三十四		西华	千				和	٥
	应		升	梢		콬	ż.	子	う
1	横槍があって句上するファイト 夜更かしの悔は時計に見抜かれる 普及した冷房だから軽視され	べからずが無ければ背くこともない	多過ぎてつけ間違えていた仮面人間は勝手なものと雨の私語	妥協することも覚えてすこし肥え冷夏とて咲かねばならぬ彼岸花	投げ売りを買わぬと罵声飛ぶ出店寝屋川市	話せない孫におもちゃの注意読む約束へ満足そうに親が折れ	新に使って南耳道に終 う一歩歩いて生きる絵 種ばかり啜り退屈な八	労働一筋一匹の蟻である柏原市	を を な会遠い昔を掘り起し を を を を を を を を を を を を を
花		津	民	È	柴		岩	大	井
田		守	垃		田		道	峠	Ł
たけ志		柳伸	路		英壬子		博友	可動	柳 五 郎

あの頃の日記がぜいたくすなという	盆三日僧侶は暴走族もどき	大阪市	泣いて勝つことを覚えた児に困り	ボリュームを上げ浪曲を子に聴かせ	迷信と強気に押せぬ大安日	富田林市	窓開いて今日病妻の外泊日	不足ない歳やと喪主へ口すべり	ネクタイが首輪に見えるサラリーマン	出雲市	完璧に袋汚れる下水口	幸福を今やインコが繰り返す	かき氷立話せず別れたり	岸和田市	山歩き思わず歌がついて出る	飲め飲めと言うから飲めば嫌がられ	落伍者はひとりも出ない三次会	大阪市	左遷地で伸ばす趣味	抜け駆けも若い故	無い袖を振るも愛	岡山県	現代の鬼はブルブル山を喰う	罪の無い寝顔翔ばねばならぬ明日	雷のこわさを知ったくそ度胸
		藤				中				板				桑				河				直			
		\mathbb{H}				村				垣				原				井				原			
		頂匈								夢				道				庸				七面			
		留子				優				西华				夫				佑				Ш			
大	一筋の紐でもつれぬ万国旗	鉄条網人間不信があからさま	成功が過去をきれいに塗り変える	和歌山	妻留守の庖丁リズムにもならず	朝顔の気儘はバラにからみつき	山荘に蟬さえ泣きに来ぬ冷夏	平田	転んでもダルマ表情変えず起き	中ジョッキでは足りず大をもてあま	追っかけるノルマへ給料ついて来ず	鳥取市	夏の日の香りは故郷の青畳	大ジョッキ男女平等ですと言う	言い負けて日記白紙のままである	海南市	せっかちの妻に任せた主導権	諦めがよくて明るい笑声	芸のある男で社長秘書となる	鳥取県	箸で取るタクト二次会面白し	井戸端の話題雲行かみ合わず	陳情団ついでに見て来た二重橋	出雲市	寒い夏関係もなく秋の虫
大阪市			9	市				市		まし	ず	市				市				県				市	
阪市横			8	岩若				帯 久		まし	ず	市小				市牛				県金				市高	
			9	ıμı				क्ति		まし	ず														
横			9	市若				市久		まし	ず	小				牛				金				高	

りものの策で二の矢が場合のの策で二の矢が場合では、い落ちて病葉は過去をいる役目道路で旗を振いるの策で高を振いるのでは、	大国は子約もできず不親切 天国は子約もできず不親切 涙には脆い良心すぐ動き	であるうと女別ない である札束が封じ込 である札束が封じ込 ともう語ることない ともう語ることない	売の愛想は手の内まで作を祈る農家もパンの然に会ったと千鳥足の
林 小	松	井 奥	両
谷	高	上 山	Щ
露仙	秀	喜弥	洋
杖 山	峰	酔 人	Q
入瀬のバスから見える水和田湖の由緒に惚れて銅 東北の旅から 東北の旅から 東北の旅から 東北の旅から	恐いママ比処こもおったおままごと 米子市 佐 伯 万葉の土笛まろき音を出し 株子市 佐 伯 朝露に触れる小路に百合の花 堺 市 大 道 砂いママ比処こもおったおままごと 株子市 佐 伯	下駄履にすれば日本の夏匂う 寝屋川市 江 口原爆忌けんめいになく油蟬間に合わそうと青ポストまで走るわからんことをわかった顔でみんな生き お布祝い幹事長男下座勤め まっ子は座持ちか結構いける口 を ろ	アイシャドー女で無いのが居る驚異 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
	美 越 乙		

十米の視界巧みにバス走る兵庫県	背中の荷どすんとおろした無人駅	ネオン街女は路地で糸を引き	子が顔を埋めて西瓜へかぶりつき	兵庫県	夏休み蟬に受難の日がつづき	四面楚歌錨を下す海がない	波に乗る男でうしろ振り向かぬ	鳥取県	病む吾子に蠅を追うしかしてやれぬ	炎天を歩む義足が鳴り止まぬ	真中に病母の床とる夏座敷	兵庫県	しっかりとひとりの世界で生きる老い	朝露に光る雑草の初々し	読経する姿勢に嘘は見あたらず	阜和田市	向日葵と語る八月十五日	母になる日の心得読んでいる	鉢巻きをして集まると恐くない	八尾市	大ジョッキ娘にあきれ世にあきれ	愛嬌のポイントわたしの低い鼻	万葉人の暮しを想いわらび摘む	米子市
大				藤				Ш				辻				古				納				增
江				後				崎								野								田
秋				実				秋				文				U				糸				竹
月				男				女				平				で				葉				馬
親子なら無理に良い所見つけたい子の病い今度も神にうそを云う	病んでから世間の耳が遠くなり	能野市	逝きし子の年を数える親でよし	脇役をゆく人世にあるゆとり	やっと五十もう五十と振りかえる	岸和田市	口下手がテキパキと言う遺産分け	日曜大工ソレ板をやれ釘をやれ	ハンガーに草臥た形で服はたれ	諫早市	流行へ颯爽として金が要る	本日は休診置薬が日の目みる	老妻をぬけぬけ褒めて炬燵酒	青森県	ボンクラをよそおう姑で平和です	ビール腹いつも外食ばかりです	畳巾一つ延ばせた試歩の朝	和歌山市	幸せをみんなで分け合う夕餉の膳	遠花火別れた人の『癖』おもう	長生きを勝手に決めて髪を染め	岸和田市	立山の雄姿眺めて小屋に寝る	頂上の雪も土産に撮っておく
		坪				島				原				五.十				坂				福		
		田				崎				田				嵐				П				浦		
		冬				富志				明				操				公				勝		
		花				子				春				史				子				晴		

蝶の声に目覚めて熱いお茶をつぐ 蝶の声に目覚めて熱いお茶をつぐ 蝶の声に目覚めて熱いお茶をつぐ	のひらに狸をのせて化のひらに狸をのせて化	と ご い い い れ て 煙草 匹 か 釣れ て 煙草	- 子園テレヒでさかす務の顔をする情定了それから何やら落着	こう こ	手でよかった怪我を慰めての窓拭き拭き雨の旅を
山 清	神	渡	水	西久	原
口水	田	辺	野	久保	3
美	秀	菩		苔	よ
穂 保	峰	句	弘、	石	子
まだ歩け歩けと朝の陽が昇るもう帰るこころが時計出して見る隠し芸昔のことにして忘れ隠し芸昔のことにして忘れ無くなってゆく酒癖を淋しがり無くなってゆく酒癖を淋しがり	録画にも起承転結ホームランパイパイと言う溶岩が段を降り	の回りみんなかたみ	声で泣いてるうち神組む心に自分を	は、	心ふとみにくきわたしねがいはあとから世間
本	浜	竹	河	高	大
H	田	内	原	田	Ш
恵	久米	紫	み	博	٤
朗	在	錆	のる	泉	金

村 好 郎	半ープした棚のダルマは左遷された中の棚の古本生きている大牛の棚の古本生きている大牛の棚の古本生きている	兄弟のたらい廻しにあう御長命修羅道に墜ちればあなたに会えるかも修羅道に墜ちればあなたに会えるかも傷口は未来のために隠さない	秋の酒徒心の亀裂汚染と飲み、大の酒徒心の亀裂汚染と飲み、大りはかの世にまでもひびく音楽がいて流灯涼し人暑し、大りではいかのである。	のは僧侶の口ばかりい短針僧む夜水になる慕情水になる慕情	窓枠に遠山はめ込むように建て母の味せんじつめると塩かげん
好郎 深く敗戦記念日となぜ言わぬ	西	菜		楠	Ш
即 といっコロに貧しき民の童べ唄 若 本 多久 深く敗戦記念日となぜ言わぬ	尾	沪	7	高	村
野		/]	T.	薫	好
コロに貧しき民の童べ唄 若 本 多久 を支える杖が欲しくなる おやの冷夏よ深く喫う紫煙 は不干渉にする夏休み は不干渉にする夏休み かではないがと念を押すピエロ かではないがと念を押すピエロ もせぬ気力を叱る影法師	栞	拉		風	郎
伊 尼 正 若 藤 本 本 森 水 多久	もせぬ気力を叱る影法師かではないがと念を押すピエのそのひとときを温める辺で帰ろうかなと独り言辺で帰ろうかなと独り言	育は不干渉にする夏休みやもやの冷夏よ深く喫う紫混迷高校野球の夏とする夏の雨気が宿病をさそいこ	を は は は は に に に に に に に に に に に に に	の方に名文みつけたり 新 聞 の方に名文みつけたりといちゃん太 切起せばカラスの勝手でしなだけねだりといちゃん太 切起せばカラスの勝手でし	く敗戦記念日となぜ言わッコロに貧しき民の童べ
茶之水多久	伊			ΙE	若
茶 之 水 多久	藤		<i>y</i> =1.	本	本
仏 助 客 志	茶			水	多
	14			客	志

III

柳

太

平

記

(29)

初代川柳の掲げた純正川柳回帰への心証であれて、化政期が帯びたデカダンス傾向は、ついて、化政期が帯びたデカダンス傾向は、ついて、化政期が帯びたデカダンス傾向は、ついて、化政期が帯びたデカダンス傾向は、ついて、化政期が構成を失墜していく過程において、正可幕府が権威を失墜していく過程において、正戸幕府が権威を失墜していく過程において、

う。二十六歳で家督相続し千石を領し、大番という観点を信条としてスタートし、その業 俳性の基盤を確立した環境に、相当な影響力 様井也有(一七〇二~一七八三)は、尾張 横井也有(一七〇二~一七八三)は、尾張 であった。 を与えた人物。それは横井也有であった。 を与えた人物。それは横井也有であった。 を与えた人物。それは横井也有であった。

たことはいうまでもない。

四十九歳(寛延元年)役職を辞し、隠世後三四十九歳(寛延元年)役職を辞し、隠世後三十年間、風雅三味の生活を送り天明三年八十二歳の高齢で没した。すなわち柄井川柳が生温した時点では、也有十六歳。也有没して八年後に柄井川柳は死去している。従って也有年後に柄井川柳は死去している。従って也有と柄井川柳は、その生涯をほぼ同じ時代で過したことになる。.

也有の父は俳諧に明るく、その影響で彼は也有の父は俳諧に明るく、その影響で彼は

也有の信条は、一口にいえば。風雅の俳風。務支考の掲げる俗談平話を尊重し実践した。

の度合いを深め、作者の抱く憤満・うっ懐 った。その狂文とは、風雅を装い極端に卑俗 おびた一因には、 そのような事柄は問題にならぬとしている。 もともとこの道は風雅の玩弄物と割り切れば そこにはよし卑俗の破礼句が生じたとしても 離が開けば開くほど発想は機智で現われる。 作者の精神の雅と題材の俗と、その雅俗の距 雑の材は興を深め趣きを増すものとなろう。 なかに自ずと雅俗を判別する風雅の眼を働か 卑俗、猥雑、不徳義の事柄にわたるも、 すべきだ。かえってある場合には、卑俗、 文章の彫琢に心をつかうは勿論のこと、材は わちその作には和漢の故事古語をちりばめ、 俗の差別を見分けるべきだとしている。すな 也有の俳文が俳諧の世界で一種の価値観を 日用四民の俗談平語の中において雅 往時の『狂文』の横行にあ

更にはそれらの始祖格たる平賀源内の狂文も 事時の主なる章題をあげると延享・宝暦期 には「風狂文章」「吞太郎が伝」「あほうの頌」 「出代りの弁」「中風の辞」などで、自らを屈 原に擬し、衆人皆酔う中に、我独り腥めたる 自意識を精いっぱいに吐きちらした狂蕩の文 章が多かった。自隋落先生と称した山崎此華 や、童楽先生と称し狂詩集を出した藤子鶉や や、童楽先生と称し狂詩集を出した藤子鶉や

為政批判というたぐいのものであった。

もてはやされた。

もっともそうした狂文の素地は、往時の世もっともそうした狂文の素地は、「史記」の滑稽伝を履きちがえ、その巧言利口そうにみえはするが、俳諧の連歌の心言利口そうにみえはするが、俳諧の連歌の心言利口そうにみえはするが、俳諧の連歌の心言利口そうにみには、「史記」の滑稽伝を履きちがえ、その巧は、「史記」の滑稽伝を履きちがえ、その巧は、「史記」の滑稽伝を履きちがえ、その巧は、「史記」の滑稽伝を履きがえ、その巧は、「中記」の滑稽伝を関きない。

たけという人物ではなかった。

要するに也有は、垢抜けのした独自の俳文の中で、自隋落のうっぷんばらしの狂文の反の中で、自隋落のうっぷんばらしの狂文の反の中で、自隋落のごとく対象へ深く切り込む執いるが、芭蕉のごとく対象へ深く切り込む執入にも迷惑を及ぼさず、害にもならぬ、機知長沙な雑俳をこととし、その処世を大いに楽軽妙な雑俳をこととし、その処世を大いに楽しむべしといい切っているわけである。 しむべしといい切っているわけである。 しむべしといい切っているわけである。 しむべしといい切っているわけである。 しむべしといい切っているわけである。 しむべしといい切っているわけである。 しむべしといい切っているわけである。 しむべしといい切っているわけであるが身ひとりの風雅の遊びに徹することこそ俳諧は何の日切にも及ぶべからず」

管見草・宝暦七年板)この意味は、俳諧と

けい眼よく也有俳文の本音を感じとり、晩年された太田南畝(四方赤良即ち蜀山人)が、

やめた方がよい。それが分別という訳だ。 大の害になり、わが身を減すような句作りは 実生活には屁の役にもたたぬものと知れば他 は益無益とは沙汰の限りで、どうせこの道が

華艶詞(奇知軽妙洒落)をもて遊ぶべし」 華艶詞(奇知軽妙洒落)をもて遊ぶべし」

「狂歌の憎むべき所は、世をそしり、人の「狂歌の憎むべき所は、世をそしり、人のうなりけり。さることはいわずとも狂歌よみの名の立つは、思わぬ濡衣をきてとがにあい怨みかうことやあらむと人にも戒め、我もたえて狂歌をいわじと心に定めける」(ぎょうぎょうし・安永元年板)

かけらも見ることができない。

"猫"に変じた神妙さは、也有の俳文弄文集である「鶉衣」(前・後・続・拾遺)四篇十二冊(二三五章)の俳本刊行の世話人になって明(二三五章)の俳本刊行の世話人になっていることで立証されている。

大身の藩能吏としての彼の処生観が、いわ

柄井川柳は殊のほか、也有の俳文弄文を愛 大であったといえる。 大であったといえる。



557

さいもんをかたらっしゃいと童子いひ

室山=再び大江山の酒顚童子の句。

祭文

形をしていたのかわからない。

栗の出る国に大きなわらは住み

天五・梅2

紀内=礎稿同様市帰りの吉原行であろうが、

「月」が今一つはっきりしない。

八木=もう一つはっきりしない句 をかけようとでもいうところか。

24

は童形の身なれば」謡曲『大江山』。なぜ童 西原=賛。童子というのは「御身ハ客僧、我

ともなしに眺めて、遊女たちの手腕にハッパ じみのコース。そのころの月を遣り手が見る

頼光たちは山伏姿であったから、

酒順童子が

558

市すきの月か遣り手の顔にさし

ばし放題だったのであろう。

である。もちろん山賊の頭だから、髪など伸 で見る酒吞童子は、子供のような総髪だから わからない」と疑問をのべられているが、絵 岡田=同。西原氏が、「童形をしていたのか

> ていく。冬もおしつまったおそろしい月だ。 西原=同。市過ぎは、だんだん月が細くなっ

「おそろしい冬の女郎」からみたものすごい

遺手」像。

酒の肴に所望したのである。

さいもんをこのまれ四天王こまり

祭文を肴に望む大江山

- 5 174

の歳の市。

買い物にと家を出て、ここから吉

559

真木のぬけがらを買染ものをする

るため、遺手の顔もものすごくなる。 じみ客に「買い切り」の札を何枚もかけさせ 岡田=同。西原氏説に賛。正月の節句に、な

室山=「市」は、十二月十七・十八日の浅草

原へ流れることになるのは、古川柳ではおな

出来事をおもしろく語り歌うようになった。 江戸時代の後には三味線にあわせて世間の、 子づけて唱えたことから始まったのであるが もと山伏が神仏の霊験をそういったもので調 者を、祭文読み・さいもんかたり、という。 調子をとってうたう歌祭文。これを業とする は錫杖を振ったり、ほら貝を吹いたりして、

12 柳 Ż # 3

室

Щ

柳

勇

西 紀

亮

(**Ξ T**)

木

迷 博 Ξ

朗

鈴

木 木 江

黄

·故岡

田

敬

内 原

恒

室山=謎解きの句である。「真木」とは、ひ のき・すぎの類。また、こうやまき、こなら のき・すぎの類。また、こうやまき、こなら などをいうが、ぬるでを入れると五倍木の木 となる。「染もの」は、おはぐろである。鉄 となる。「染もの」は、おはぐろである。鉄

灰(アク)であろう。染物をするには木灰が西原=真木のぬけがらとは「木灰」の事で、

鈴木=西原氏説賛。灰汁でこの句氷解。 も存在した。

560 時まわりおじぎをしてハしんを切

岡田=まだ幾ぶん不安だが、西原説が穏当か。

室山=「時まわり」とすると、夜警あるいは

もない。これが「時まゐり」だと、丑の刻参らない。これが「時まゐり」がはっきりしない。おじぎをせざるを得ない対象と出あってそのひょうしに、提燈の灯の芯が立ちすぎてそのひょうが、それではおもしろくもなんとなるだろうが、それではおもしろくもない。これが「時まゐり」だと、丑の刻参もない。これが「時まゐり」だと、丑の刻参

りになり、

いさつしては、暗くなった提灯のローソクのの芯が切れぬことをあらわす。の芯が切れぬことをあらわす。の芯が切れぬことをあらわす。が明れぬことをあらわす。

清=「時まわり」の語、ハッキリしないが、芯を切る。

吉原ねずの番ではなかろうか。

青木=時廻り―夜回り、は、夜のパトロール中、盗賊・火の用心のため、知人に限らず夜中途った人には「お晩です」と声をかけ、それとなく人相を見るために、灯をあかるくすれとなく人相を見るために、ボを切ったのではなかろうか。

時参りクサメをするとしんが切れば「時まゐり」つまり丑の時参りの誤りか。 岡田=礎稿ご引用の句からして、どうも上五

八.3

ばかへといって笑わせるあふむ石

Oh . 8

561

室山=物の響きを反響する鸚鵡石は、諸国に あるが、伊勢の志摩半島の磯辺のが名高い。

もしへ紙を一枚おくんなんしょ

ないで下さい」などと書いてあるが、いつのム・インコの類の前に、「悪いことばを教えの、デパートの小鳥売場の九官鳥やオーの「へ」や「ご新造さんへ」の「へ」と同じ

間、東西二十四間の巨大な岩壁。 入江=賛。この鸚鵡石、補足すると、高さ九時代でも人間は同じことをするものである。

此石がそだかといへはもふまねる 三十一・15

ばんハ古市だと石がものをいい

著「川柳東海道」下巻"伊勢路"に書いておるが、ずっと山中に入った中村のが有名。拙初の一日。但し、鸚鵡石は伊勢の磯辺にもあ初・39

562 茶わんハせふちだからうたハ御めんよ

きました。

室山=酒宴等で唄を所望され、それがいやなら盃でなく、この茶碗でぐっと一杯……といわれての返事。「せふち」は承知。 入江=賛。踊子か。茶わん酒ならうけるが、うたはごめんだよ。

岡田=礎稿、ご明解。 紀内=成程、不明でした。

- 25 -



女と妻のあいだで 好きな彩を着る

阪川柳会にてご指導いただきながら、勝山双

昭和四十六年一月、同人に推され、現在南大

昭和四十二年十月南大阪川柳会へ初出席

歴

大阪市生野区勝山南一丁目一八一一〇

賞受賞

和歌山市小松原町生れ

母 主人 次男の四人幕し

現在に至っております。 (昭和45年に川柳塔 葉川柳会で女性ばかりの集いの一員として、

55年度路郎賞受賞作

受賞作決定

中島生々庵

提出という手続きをとられ、委員長は別室に 月4日夜、恒例により本社楼上に於て開催さ こもって慎重な選に入り、やがて粛々とした 編集部で清記された無記名の作品を委員長に れた。説明する迄もなく、数カ月に亘る各選 その厳しい雰囲気には心うたれるものがある。 委員長の発表が始まる。毎年のことながら、 考委員が持ちよった大変な労苦の結集から、 55年度路郎賞、川柳塔賞の二賞決定は、9

55年度路郎賞受賞作

女と妻のあいだで 好きな彩を着る

にもやさしく、そして余すところなく表現さ れて読む人にすなおに受け入れられる句。 ミスとミセスの変りようが、姿にも心構え 小出 智子

秋の蚊よお前これから 路郎賞 準優秀作第一席 どうする気

って来るのが楽しい。

秋の蚊冬の蠅、もののあわれが私達日常生 野田素身郎

> ためされて 共感する点が多い。 自嘲の句として、作者の謙譲さが嬉しく伝 路郎賞 準優秀作第二席 いるとも知らずまだ喋り 児島与呂志

川柳塔賞受賞として該当するものな 55年度川柳塔賞受賞作

26

下したように見えるこの句から作者の生活を 活にもしばしば投影して来る。何気なく読み

大胆な女は踵返さない 準川柳塔賞

準川 柳塔賞 園山多賀子

〇歳 の瞳の中にい る私 古田 寛子

路郎賞候補作品

正 本 水 客

ためされているとも知らずまだ喋り 推薦句 児島与呂志

押しやれば手元に戻る流し雛 言いたいことあるまま夫婦三日過ぎ 小出 久家代仕男 智子

何となく師走の流れについてゆく

憶病な男の財布は空にせず スープ皿あたため夜の平和くる 水草も風に堪えてる動きする 黒川 宮西 津田 みどり 紫香 与史

> 善後策楽観組は箸をとり 色幾つ重ねても出ぬ海の青 ぜいたくな一日部屋にバラの東 時広

> > 敬一 路

ライオンの風格に似て子が這うよ 誰もいないと泣けない女です 进

文平

蘭幸

小島

若 本 多

久

志

もう一人の私がいればぬりつぶす

橋元

美恵

淮

川柳塔賞

岩砕く水方円に逆らわず

林

露杖

子らの目へ母平等に切りわける 準推選句 小林由多香

胎動へ毛糸いそいそ減ってゆき 仲どんたく

肩書のない父人間味がにじみ 内職の掌が百円の汗を知り ひと粒ずつ祈りの中で梅漬ける 田垣 八木

チリほどの虫にも生きている歓喜

夕花 方大 千代

堀江

正朗

準特選

老兵同志会えば慰めあう世相 どの紙幣も倖せなんて書いてない 母の日も忘れられてる母も居る 高橋 工藤 綾珠

職人が我が学歴を恥とせず 萩の寺女の業を埋めにゆく 河野 鈴木村諷子 梅本登美也

> 西 尾

> > 栞

翔んで翔んで女は生活の垢見せぬ 浪曲で敬老の日をごまかされ 合掌をほどけば自我が動き出す 堀江 工藤

老人をタライ回わしのテレビ切る 宫西

さよならと言えば明日から敵になる 病院の顔役になる不甲斐なさ 卸一つかけ忘れている自画像で 不一田 浦野 垂井千寿子 和子

座禅組むようにいい蛸蒸し上り 思い切り左へ寄ってしゃべって見 遠山 可住 文平

河井

まっすぐに歩けば風も陽も味方 老いの意地へんなところで正座して 骨しゃぶる成程鯛と申し上げ 嘉数 水粉 干翁

ライターの炎で孤独慰める アドバルン下界は殺気溢れてる 藤井 福浦

勝晴

明朗

秋の蚊よお前これからどうする気

野田素身郎

27

Ш 村 好 郎

余ってもただでは食わせる米は無し

暗やみになれてまわりの彩も見え 八木

千代

あきらめて沈めば石のやすらぎよ

合掌をほどけば自我が動きだす 、ちまゆらゆら酔生夢死の一生か 堀江 谷垣 嘉数千代香 史好 芳子

秋の蚊よお前これからどうする気

上を見ろ上を見るなと云い聞かせ

野田素身郎

金井

文秋

弘生

傷心へ神は時間という処方 女と妻のあいだで好きな彩を着る 川口

押しやれば手元に戻る流し雛 どの紙幣も倖せなんて書いてない 香奠を数える指が愉しそう 高杉 小出 久家代仕男

鬼遊

智子

菊 沢 小松 袁

眼帯の中をあの日の貨車がいく 焼香をさせて貰えぬ女が居り 篝火に鵜は満腹を許されぬ 見て貰う為には咲かぬ野辺の花 嘉数千代香 林 鈴木村諷子 柴田英壬子 瑞枝

里吉

いたわりへ危うく寡婦を忘れかけ 鈴つける役逆らわぬ母がある

香奠を数える指が愉しそう 骨しゃぶる成程鯛と申し上げ 高杉 水粉 八木 千代

女と妻のあいだで好きな彩を着る

小出

智子

の翳りがこの句に根ざしている。

橘 高 薫 風

おむつ更え赤ちゃんの目にいる私 友達と一緒に齢をとってゆく 小出 智子

秋の蚊よお前これからどうする気 西森 花村

逆らった娘が生む孫の名を付ける いちにちがだいじ六十七になり 投票日握手裏切る痛快さ 堀江 野田素身郎 高橋千万子 正朗

ませんでした。

何度か挫折しそうになった私が、今日

鈴木村諷子

ここまでは人真似ででもこられたが 山本規不風

古文書のように出て来たラブレター 晩年の味方は一人あればよい 大坂 形水 蘭幸

文平 旅の町このままここに住めそうな

てくれそうである。そんな屋並と人情の町。 淋しい町だが今の気持にそぐうて心労を癒し 〔評〕傷心の一人旅にふと途中下車した町、 八木 千代

鬼遊 昨年の暮にご主人の急逝に会われた作者の心 一昨年の一月に長い看病の後義母を亡くし

よろこび

小 出 智

晴れがましく、路郎賞がいただけるなん せがありました夜は、複雑な思いで眠れ て、こんなことで良いのでしょうか。只 々、面映ゆいばかりです。受賞のお知ら マンネリ化しております私の川柳に、

友の皆さんのお蔭と、深く感謝申し上げ まで川柳を続けられ、この度、受賞させ ております。 ていただけたのも、先生方や、先輩、柳

ありがとうございました。

第 14 JII 柳 塔 賞

55 年 度 該 当 作 な

JI| 柳塔賞候補作品

嘘少しまぜると話円くなり

武田 小谷

掬治 照子 吊り橋をあなたの後なら渡る

黒

JII

紫

香

子は親の傘のしずくをはねかえす 歯が痛いので決断が早くなる この蟻がなんで五階の砂糖知る

矢野 桑原

JII

柳塔賞

準優秀作品

大 坂 形

水

太陽の恵みに麻薬の実が育つ 巣立たせて時計夫婦の音になり 父親の抜け殼がある日曜日 シャッターを下して私の灯をともす 一対の万灯にして父母逢わせ 高杉 朝倉 中森葉士人 高田てまり

〇歳の

竹原市

古

田

寬

子

瞳の中にいる私

大胆な女は

出雲市

袁

山

多賀子

踵返さない

海青く青く魚の声を聞く 太陽はここにも小さい影がある 越村 桑田 森田

植え終る日を出稼ぎの日と決める 角 耕草

雑然と記者の机は生きている

有働

芳仙

準推薦

もう

人の私が

大阪市

橋

元

美

恵

準推薦

いればぬりつぶす

いそいそと家事くり返す幸もある ***** 西出 園山

推薦句

古田 寛子

○歳の瞳の中にいる私

ATL 前 役 所 市 2 3

静子

シャッターを下して私の灯をともす 桑田

静子

準推薦

合せ鏡の間で女の夢が翔ぶ 準推薦

蝶々を飛ばしてみたい春を描く

高杉

干步

村上田鶴子

大胆な女は踵返さない

園山多賀子

戸 田 古

方

ひとり飲む酒ひとり酔うべししやぼんだま 小鋏の切っ先哀しいまでに切れ 静

かつこ

かなしい木魚愉快な音たてる 太陽の恵みに麻薬の実が育つ 生きた唄木を切る音も仲間なり 窓際で天職ってなんだろう 芋掘れば僕そっくりの顔も出る たとう紙の中で切り札温める 葉

明日に死が見えても今は生きている

を守ってる事にはならないから、

もう一人の私がいればぬりつぶす

美

恵

してその中から自分の新しい道を切り拓

枯 7

分間の柳論

先輩の作風を模倣するだけで、

出 原 敬

れば、まず先輩の句を徹底的に習って、そ に新しいものを創り出してゆく、言い替え してくれた川柳遺産を土台にして、その上 ならない、単なる先輩の真似だけでは伝統 統を守っているのだと言う錯覚を犯しては 先輩の残 自分は伝 てしまう事も有り得ると思う。しかも、 限り、句という事について、先輩と対立し あると思う。 のようなところから新しい進歩と創造が生 て行くこと、これが伝統を守ると言う事で れて来るように思われるのだが、これは私 いる人にも、その態度が本当のものである 人の偏見であろうか。 従って伝統を守って作句して

社 告

昭和56年度からの 川柳塔賞選考委員

の新陣容! 八尾市

杉

鬼

遊

八尾市 松原市 香 高

市 谷

黒

尼崎

Ш

香

史 紫

好

垣

30

III

西华

又

同 人 吟

句

前月号から

柳 太

加

ひび入った土鈴終った恋の音

葉で綴られたこの作品は、またこの句の生命 まるで、メルヘンの世界へ誘いこむような言 失恋の悲しさをひびの入った土鈴とみる。 局橋 千万子

飲めぬからコップ一杯注いで置く

さにそれである。こまかい評を要しない。頭 さず摑む。そこに川柳がある。この句は、 のさがる思いがする。 誰れもが見ていて、見過す。 それを、すか ま

それほどのことでもないのに四面楚歌

って隙がない。 楚歌も分析すれば、この句のように、隙があ 上・中と軽く入り、下五で重みをのせたあ 作家の力量躍如たるものがある。四面

そのようなものだと思う。

どたん場の俺にほんとの俺を見る

を見たというが、まだまだ、どたん場が、続 ら神に近い人だろう。追いつめられて、自分 自分が自分を見る。つねにそれが出来るな

くのではないだろうか。厳しい人生詩である。 三面鏡ひらくと女のかぞえ歌

思いがする。 りでもしているような、夕花調に魅せられる たは悲しみだろうか。美しい五色の糸で綾と る。どんなかぞえ歌だろう。よろこびか、 鏡は昔から、女体の一部であるとされてい 高橋 夕花 ŧ

国賓へ集る鹿はひもじかろ

の句である。 さがあるのではないだろうか。鋭るどい穿ち ように来賓国に対して、ひもじさや、 空腹にされている。招待国自身が、 鹿寄せのため、国賓に集まる鹿は、 本多 この鹿の 物欲し 事前に

本のとおり作った味になじめない

ある。本で心情までつかむことは、むつかし い。料理も川柳も相通ずるものがある。 うまい料理は、 "思いやり"からの言葉が 野田素身郎

割り勘で父の葬式出すと決め

えば、むしろ、この父親の生前中の子弟教育 惑をかけるひとが多い現代である。それを思 知らないが、親の葬式費まで、他人さまに迷 親の葬式まで割勘で出すとは、と思うかも 不二田一三夫

が、うかがわれてたのしい気がする。 けんめいに咲く紫陽花と見てくれず

と呼んでいる。 とがいる。私たち仲間は、そのひとを苦労性 めいに尽しながら、浮気性とみられているひ れている損な花である。私の周囲にも、けん 紫陽花は、つねに"移り気"の代名詞にさ

神様に無理な約束してしまい

いで」と神様にいいたい。ユーモアの句であ 約束をして、苦しんでいる、おかしなものだ。 子で、ついつい神様にまで、ええ格好をして 「約束を破った弱い人間を、お叱りにならな 「ええ格好し」というている。そのような調 人前で、よい格好をするひとを、大阪では 岩本雀踊子

母親の心配母よりきれいな娘

さを感じさせる。 ている。「母よりきれいな」が、まるでホー ムランの飛球ののびを見ているような、痛快 美しい娘を持った親の心情を巧みに表現し

地獄の方は満員で今日も生きている

って、現世でより楽しく暮したいとねがうの で見る限り地獄も人手不足だろうか、定員制 になっているらしい。それなら一番遊鬼とな "無限地獄"という言葉があるが、この句 凡人ではあるまいか。



菊沢小松園選

噴水をのら大水としてなめる 型暦の母の若さにやる気湧く 平凡な道を選んだコップ酒 正式な道を選んだコップ酒	頭打つまではと親も匙を投げ おひとりで来てねに男ひっかかり おひとりで来てねに男ひっかかり がみ足らぬ奴がせっせと酌ぎ回り かみ足らぬ奴がせっせと酌ぎ回り	名古屋市 負けてからでんでん虫と友になり 倒産の店に残った招き猫 耐よ降れどうせ俺らは落ちこぼれ であるがらティーカップに乗ってみる がらティーカップに乗ってみる
*	荣 中	越
В	日 谷	村
fi	利	枯
설	美 美	梢
初 ふゆり たんぎり た	いつ 里音い兵	交通事故 専 本 要 表 要 を 要 も 要 も 要 も 要 も 要 も 要 も 要 も 要 も
産を故郷へ知らせる字が踊りんぎりがつかぬ女の積む小石とりある女どこから勝負するとりある女どこから勝負する	直ざいっちった と脱いだ兜をう と脱いだ兜をう	大和高田市 数せめて金持の乗るくるま 響やなお日さんにたてつく をいるといったがはいのくらしに省エネなんかないのくらしに省エネなんかないのくらしに省エネなんかないのくらした。
へ知らせる字が踊って知らせる字が踊って知らせる字が踊って から 勝負す	直ざいっちったよい 直ざいっちったがわれ と脱いだ兜をうたがわれ と脱いだ兜をうたがわれ	大和せめて金持の乗るくれただけが教えてくれただけが教えてくれただけが
へ知らせる字が踊り かぬ女の積む小石 熊本市	直ざいら古ったよい 直ざいら古ったがわれ と脱いだ兜をうたがわれ と脱いだ兜をうたがわれ	具取市 というしに省エネなんかない をお日さんにたてつく が教えてくれただけ が教えてくれただけ
へ知らせる字が踊り 作本市 有 などこから勝負する	直 ごいっちったよい直 ごいっちったよいれ 自旗は持たずい 出 の 思い 出 に 母 が い るの 思い 出 に 母 が い るの 思い 出 に 母 が い るの 思い 出 に 母 が い るい 自旗は 持た ずい 自旋は は かい 自旋は は かい 自旋は は かい 自旋は は かい 自旋は は いい 自旋は は いい 自旋は は いい 自旋は な い<td>大和高田市 岸 せめて金持の乗るくるま が教えてくれただけ が教えてくれただけ が教えてくれただけ</td>	大和高田市 岸 せめて金持の乗るくるま が教えてくれただけ が教えてくれただけ が教えてくれただけ

れた別れ言葉と手れた別れ言葉と手	島根県もう嘘がつけぬ素顔で生きていく 夢を追う過去と未来に判を押す 夢を追う過去と未来に判を押す 子等巣立ち不要となった防波堤 今治市	生命燃えつきるまで医者の嘘 自動巻きの様な日課の老夫婦 真剣さ伝わる握手ならしたい 雑草と共に先祖の墓眠り 再婚を許して貰う墓詣り 枠の中にはまらぬ男もてあまし 大阪市 運命を変えたく或日くじを買う お互に何か思っていて無言 首垂れて花はひとりでよう生きず 霊魂を信じないのも盆休み	今に見ていろとおこぼれ頂戴し
高	渡	小	
杉	辺 本	谷中	
千	南文	清紫	
歩	奉	女浪	
若者に信号がない突走る出雲市場の背を流すごとくに墓洗う母の愛こもるくせ字の便りよむ出雲市	流れ星早口で追う願い事とりあえず互いに承知の嘘を吐くとりあえず互いに承知の嘘を吐くを腹へ話うるさくなってくる空腹へ話うるさくなってくる。	間サラのロマン屋台を曳く気なり 脱サラのロマン屋台を曳く気なり 養猫にかかれましたともいえぬ傷 養猫にかかれましたともいえぬ傷 愛猫にかかれましたともいえぬ傷 でイヤより氷砂糖のよい場合 叮嚀な言葉は機嫌悪い妻 が出し ひと握りに足らぬ年金だが嬉し 水やれば笑顔と変る植木鉢 水やれば笑顔と変る植木鉢 水やれば笑顔と変る植木鉢	待つことの幸せじんと通夜のみち
田 吉	時	仁 豊 藤	
中岡	Ш	部田原	
き み 叶 え	訊成	四 遊 世 史 郎 歩	

白 石 大野武 太 大阪市 藤 森 小雅 白 石 大野 武 本 久仁 財 金 大田 美しい嘘が並んだ天の川 (タの米異値とか明をに対でおく ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	の斗里可といまとまりていなりを信じおとなになりきでには勝てぬどんどん距離下り岩は上手によけてくれるには勝てぬどんどん距離	その位置に坐れば似合う顔になる お手玉を振ると少女の手に戻り 掘ったのがわくわく見てる陥し穴 旭川市	金払いよいからニッコリされただけ 注文をすれば社長といいなおし 国禁の本を重ねて昼寝する 大阪市	倦怠期家系どおりに肥えてきた妻 一握りに一指つまみ一○○g
武 太 美しい嘘が並んだ天の川	白 高	高	朝 矢	大	
大大 大阪市 藤 森 小 と同じまの鈴 ところしてる と は 要にある と は 要にある と が な と は 要に かっ と の は 要に な と で ま と か ま か と で ま と か ま か と で ま と か ま か と で ま と か ま か と か ま か と か ま か と か ま か と か ま か と か ま か か と か か よ か ま か か と か な と か ま か か と か な と か な と で 香 合 格 を 上 げ か な ち に 妻 も 財 布 を 別 に 持 ち か よ か っ と で 香 合 格 を 上 げ か な ち に 妻 も 財 布 を 別 に 持 ち か な ら な ら な ら と で る 音 と が な と で 香 合 格 を 上 げ か な ち に 妻 も 財 布 を 別 に 持 ち か な ち に 妻 も 財 布 を 別 に 持 ち か な ら な ら な ら と で 香 合 格 を 上 げ か な に 告 は 駅 も 学 校 も 裏 に ある な ら め て い る 降 へ 息 を こ ろ し て る と こ ろ し て る と こ ろ し て る と こ ろ し て る と こ ろ し て る と こ ろ し て る と こ ろ し て る と こ ろ し て る と い か と は か よ か な は か よ か な か よ か な は か よ か な は か よ か な な か よ か な か な は か よ か な な か よ か な か な は か よ か な か な は か よ か な か な か よ か な か よ か な か よ か な か よ か よ	石 杉	此方	倉 野	野	
関カメラを待つ間の廊下しゃべらない 関戦のあの日と同じ雲の峰 美しい嘘が並んだ天の川 戦の列ジグザグ行進などしない 齢長が下駄履でくる荒天続き 痩せた穂にもはや鳴らさぬおどし銃 痩せた穂にもはや鳴らさぬおどし銃 を立が止んでも立読みまだ続き 紫のふくさで香合格を上げ 紫のふくさで香合格を上げ 紫のふくさで香合格を上げ 赤立ちに妻も財布を別に持ち 大阪市 藤 ボケットの小銭に酔が未だのこり 合鍵の鈴を信じて出る夫婦 定年へ各駅停車で来た素顔 大阪市 藤 本 広告は駅も学校も裏にある もめている隣へ息をころしてる	千	喜	大 佳	武	
スラを待つ間の廊下しゃべらない メラを待つ間の廊下しゃべらない のあの日と同じ雲の峰 唐津市 浜 本 久 のあの日と同じ雲の峰 唐津市 浜 本 久 が下駄履でくる荒天続き 島根県 角 変が東をむいたままで暮れ た穂にもはや鳴らさぬおどし銃 の草が稲より高く伸び 西宮市 山 田 曹 でよくさで香合格を上げ なくさで香合格を上げ か上んでも立読みまだ続き ふくさで香合格を上げ へ各駅停車で来た素顔 へ各駅停車で来た素顔 へ各駅停車で来た素顔 へ名駅停車で来た素顔 へ名駅停車で来た素顔 へ名駅停車で来た素顔 へ名駅停車で来た素顔 へ名駅停車で来た素顔 大阪市 藤 森 小 大阪市 藤 森 小	潔 歩		柏雲	太	
716 1.	ている隣へ息をころしてるている隣へ息をころしてる大阪市 清 水大阪市 清 水大阪市 清 水大阪市 清 水大阪市 清 水大阪市 清 水 大阪市 清 水 大阪市 清 水 大阪市 満 水 大阪市 森 大阪市 本 大阪 本 大阪	立ちに妻も財布を別に持ち 米子市 雑 賀 美立が止んでも立読みまだ続き 米子市 雑 賀 美	り孫のゆかたも縫うてやりの草が稲より高く伸び 西宮市 山 田の草が稲より高く伸び 西宮市 山 田	長が下駄履でくる荒天続きしい嘘が並んだ天の川	戦のあの日と同じ雲の峰 唐津市 浜 本カメラを待つ間の廊下しゃべらない

小さな思い出川のほとりで笑ってる 鏡にも今日は写せぬ顔が有る ひとつの山が母を話しているお盆 野しい言葉はお世辞では出ない 自分より子のする咳が気にかかり 親戚の懇親会となる法事	国山県	明の出てる大工はのって 寝起き野球母校が勝って 対一日照権はゆずられぬ 対一日照権はゆずられぬ を消す松喰虫にある怒り を城のような屋上ビヤホ を城のような屋上ビヤホ も猫も真夏のからだ持て
池	柳平	山 杉 今
H	原井	本 本 村
#	孝	桐 智 夕 慧
fili	柳	下 子 路
安静の時間だベッドへ追い込まれ 特漬けて明治の母の処世訓 西宮 作さと裸で書いたとも知らず 他人にはどう見えようと生きる術 では来て久々に見る蛇の目傘 京に来て久々に見る蛇の目傘	神様と約束なかなか守れない神様と約束なかなか守れない泣き虫のカッパ妥協して水もら泣き虫のカッパ妥協して水もられい勉強したと欠損あきらめる方舟に乗って忘れた親の恩を天下蟻にも蟻の生きる道	も地も人も病んでる核 きている証のようにか きている証のようにか きている証のようにか おかけた橋なら渡ら 力つきた男の眉がうす 日生きる確かな朝の陽 サットに諸行無常がお
世訓 一世訓 西宮市 かと生きる術 の目傘 倉敷市	高知県	だ が 昇る 八 大 大 ななる 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 八 に 市 十 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、
回訓 西宮市 野 西宮市 野 全生きる術 大	めもい	れ尾市市場市
市	める 高知県 県 県	れ尾市市市市
大 野	ある 高知県 島根県 星 山	れる市場市場市場市場市場市場市場市場では、大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大

山深く人ひそかなる色瓦大阪市		地図にない愛の道へのテープ切る	大阪市	禅も珍らしがられる世となりぬ	住所録我れには過ぎた方ばかり	大阪市	メガネ拭き心の曇りそのまんま	いまの世に波長の合わぬ齢と知る	兵庫県	恋の字が虹に見えるも若いうち	孫の置土産菓子くず慕う蟻の列	尼崎市	夢を追う机返事もうわの空	快方に向ういびきは見守られ	熊本市	顔よりも大きい朱盃お立酒	つまみ食い叱りながらも味を聞く	島根県	理不尽をはね返せない己が性	ラッシュアワー老いに甘えて席をとり	大阪市	アイシャドー落して母にかえる朝	手紙書く途中電話にしてしまい
Į.H.			鍛			岩			野々			中			北			岩			吐		
朴	f		原			田			П			辻			Щ			田			田		
芙			于			八文			ゆう			Ŧ			æ.			Ξ			公		
女	ζ		里			銭			也			子			進			和					
焼海苔と玉子焼とで能もなしふとう棚ここは築地の明石町		よく冴えた声で診察呼び込まれ	コンパクト公務の合い間に覗く女	鳥取市 武	スクラップにしただけ記事はもう読まぬ	団地へは静かな静かな盆がくる	兵庫県 中	昆虫の厄日はつづく夏休み	母と子のはしゃぎながら花火する	唐津市 木	死ぬ事はこわいと和尚のヘルメット	亡夫の名を墓標でなぞる老母の指	浜田市 佐	獣捕る銃が人間追い廻す	有る丈の力で線香花火かな	唐津市 田	水割りの少しが今日をしめくくり	目の前で夢がこわれるシャボン玉	唐津市 山	寂れ行く浜べの店の老夫婦	嫁げば寂し残れば厳し適齢期	唐津市 桑	けずってけずって女は芯をとがらせる
	П			田			田			塚			々木			П			下			原	
	欣			帆			白			素			小			虹			勝			掬	

裕

汀

治

石

李

雀

すそだとは云わせぬものを握っているのかコマーシャルリー はいい はい	乳歯から一人前のセリフ漏れ 割島市 伊 東の間の生命へ花火燃え尽す 米子市 寺 平 米子市 寺 平 水子市 大 水子市 寺 平 水子市 大 小 木子市 中 水 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	音立ててストロー吸う爪赤く染め 三味の音の奥が知りたい先斗町 三味の音の奥が知りたい先斗町 大阪市 溝 、 大阪市 溝 、	安印の見えない人生老夫婦 というでは、 というでは、 というでは、 をいうでは、 ないでは、 をいったりをのあと廃品回収車 ない。 ない。 ない。 ない。 ない。 ない。 ない。 ない。
満 山 野	沢 藤	渕 川	田端
三 蚊 不 千	み ど 里 枝	美	静 三 佳 男
	セ家 姿保 - に 見険	行宝 夫肯 楽石 時定	見 気 一 明 抜 紛 泊 日
遠き世に合掌作りの知恵を生み 米子市 野空へ雷 孫を小さく抱き 米子市 野学掘りの園児軍手もおどり出し 米子市 野	は 電気製 はまずし	時々路傍で会うた人のよう 一時々路傍で会うた人のよう 一石箱女の見栄がつめてある 東予市 小 東予市 小	明日の日へ今日の幸福抱いて寝る 気紛れが電話をすると雨になる 西宮市 妹
み 米 し 米知って 市 市 市	り黙って立っており り黙って立っており り黙って立っており り黙って立っており	会うた人のよう 会うた人のよう 東子市 栄がつめてある 東子市 である 東子市	葉撰る た阪市 大阪市
み 米 し 米 知らず 田 野	り サ 立 ち ど まり 兵 車 県 伊 し 立 ち ど まり 兵 車 県 伊 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	ター頼む顔をより 足鷲市 波	葉撰る た阪市 大阪市 関

しばらくは巨人忘れて甲子園お隣りも孫が来ている夏祭り	山のあるところに住んでもう定年		箸ぐせは片方いつもちびている	通院で脚腰だけはほめられる。第四十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	Í	世知辛させめて言葉をまるく選る	鳥取県	腹時計うんざりしてるなまけもの	三人目祖父が押してる乳母車	寝屋川市	頼みごとあって椅子にも浅くかけ	七回忌故人に縁のない話題	出雲市	流れ星どこかで誰かが星になる	父母はもういない夜爪を切っている	豊中市	うるさいのが一人黙ってる気味悪さ	判る日もあるだろ目の上の瘤でいる	和歌山市	折り鶴の夢をかなえて舞い上り
			西	社			羽津川			立. ::::::::::::::::::::::::::::::::::::			園			満			富工	
	田君		平	音						床			山多			仲			上:	
							公			晴			賀			きくご			光	
	枝	5	夫	4	•		75			風			子			子			代	
亡き義母の通りにわたしもなってくる	孫の手にホーキ持たせて蛍がり	まて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	羽びそうな女羽べそうな服を買い唐津市	妻の服ゆとりがほしいヒップです		貧乏な家ほど物をよく配り	籠を去る時こそ小鳥けたたまし		娘から留守番たのむと電話くる	あなたでも心のドアは明けられぬ	島根県	自転車に乗れて孫が用を聞き	お互いによいとこ見つけ庇い合い	岡山県	とんぼ追う目をとんぼは知って居り	鼻の下が長いとは鏡よう言わぬ	鳥取県	この西瓜学童疎開の味がする	捨て猫が訴えている草の中	松原市
岩	1:	Ш	浜		高			逸			堀			木			和			本
佐	水	根	本		Ш						Ί.			村			井			多
富	HK	左	義		てま						百			柳			観			洋
子	江	春	美		より			名			代			昇			洋			子

雲切れたそこから遠い故郷思う 大阪市 村 上 新せない女は爪を研いで待ち ト	百杉に島の歴史をかえりみ	赤泉で肖された数字などすまい赤泉で肖された数字などすまい赤泉で肖された数字などすまい赤泉で肖された数字などすまい赤泉で肖された数字などすまい赤泉で肖された数字などすまい赤泉で肖された数字などすまい赤泉で肖された数字などすまい赤泉で肖された数字などすまい赤泉で肖された数字などすまい	麻 内	ながす親のあせりにセミが啼く 産がって脱いだ老母の胸痛々し 米子市 菅 井 株の間の絵皿が旅を話しかけ 米子市 菅 井
句 田 彩昧 鶴		ろ スッ	す	美 未 昭
地 子 平	子 都	子 実 子	玄 え	恵 知 治
白い花女を美女にして死なすと手箱開けると寡婦はねつけないと手が提げる女の涙壺	げさに繃帯まかれ一人っ子 一体萱を集めて寺の屋根 である	総入歯しても女は髪を染め 進軍の歩調少年鼓笛隊 大洲市 ** 黒沢が見事に燃えた異色篇 黒沢が見事に燃えた異色篇	りですネ ネクタイ褒められる ★ 名古屋市 に正宗があり誕生日 とは結局逆戻り	他人に言うぐらいの辛さは高が知れ 緑陰に腰かけいっぱい呼吸する 神戸市 な神戸市 な
	市川	沢	鈴木	三 久 波 宅 保
				た
	鱼类	暁	可	哲植だ

一藤甲吉氏歓迎会

なにわ会館 で

鬼 游

超過した。 を岳人さん、後半を栞さんがダイヤルを廻し より方法がない。同人名簿を二分して、 るのに郵便では間に合わず、電話を利用する 入った。急なことなので皆さんにお知らせす 青森から工藤甲吉さんが来阪される報せが たちまち歓迎陣は予定の人員をはるかに 「参加します」「ぜひお会いしたい」

札が用意された。 される。栞さんの案で、各人の胸につける名 乱もないが、一対三十では、甲吉さんが混迷 いても会ったことがない。一対一であれば混 は初対面である。既に誌上でお名前は知って 生々庵主幹と薫風さんを除いては他の人々

八月二十六日。場所は上六の。なにわ会館

来の柳友を迎える拍手は高く、席につかれて 案内されて、甲吉さんが入って来られた。遠 顔にはびっくりだった。 ただけに、今初めて見る、 ての職業から、意志露わな風貌を想像してい からもなおつづく。青森の風土と新聞人とし 次々と参加者の明るい顔が揃う。薫風さんに 一〇六号室である。どんよりした曇り空の下 小柄で好々爺のお

時代から、川柳作家として大きな存在である。 を弔うのに、福井の曹洞宗、 地元青森の新聞社を辞めてこれから悠々自適 の生活に入られる矢先に、奥さんを亡くされ 「大正二年丑歳生れの六十七歳で、川柳雑誌 薫風さんが通訳をすると云う冗談があり、 今度その奥さんと、お母さんの菩提 吉祥山永平寺に

> さんから、甲吉さんを紹介された。 お参りに来られ、大阪に寄られた」と、 つづいて生々庵主幹から歓迎の挨拶があり、

うして額に刻まれた六本の皺には、今度こそ うか、いままでの川柳と違う、路郎門を叩き 句力も低下した」と語られたが、なかなかど 阪へ乗り込むことだったが、女房に死なれて 今日に到った。私の念願は路郎賞をとって大 からのあこがれであった、社会生活川柳と云 三太郎氏に破門される前に氏のもとを去り、 湖となる。の色紙をお土産に渡された。 ていた等を話され、 "夕焼けが映えて浄 十年前に青森で会った思い出や、同人吟の選 路郎賞を受けに来阪される気魄が伺われた。 からエスカレーターの下りに乗ったように作 前田雀郎氏につき、雀郎氏亡きあと、若い時 さんは「私は津軽のじょっぱりである」と気 句を通じて甲吉さんの生活のいろいろを知っ 骨のほどを示され、「川柳については、 各人の自己紹介には、終始立ったままで、 司会西田柳宏子さんの声に立たれた、甲吉

勢に胸が熱くなった。

いちいちうなずいておられた。その律儀な姿

句は今日のよい思い出になることだろう。甲 た出題なのに多くの佳句があり、その一句 「りんご」の二題がだされた。子期しなかっ 当日の席題は、甲吉さんにちなみ「珍客」

さんからお土産の賞品が出された 吉選「りんご」の天、 の間にか女性軍の合唱となり、 に時の経つのも忘れるのだった。 天笑さんが歌う "津軽海峡冬景色"も、 地 人の三才には甲 和気あいあ 吉 UX

> 珍客へめったに来ない人も来る 珍客が大阪弁でもてなされ 遠来の客に話も後や先

> > 心の矢リンゴを的に放ちたし

君

ーパー「歓迎工藤甲吉さん」 実に印象的であった。 壁に貼られた、 村田瓢太さんのマジックペ の赤い文字が、

珍 客 西 尾

珍客へ歓迎陣のあわてよっ 珍客へ欲得もなし夫婦して 珍客はおんぶに抱っこされちまい 珍客を迎え話題果てしない 珍客が人なつこいので安心 珍客の訛りに歓迎温くなる 珍客へ一人も欠けぬ子が並び 珍客へ逢う日の言葉撰って置く 北国の珍客浪速の灯に酔うて 珍客が昔の恋の裏ばなし 珍客が紳士で仮面とり替える 珍客がちっとも記憶とちごてない 雑魚寝でもよいと珍客決めている 肩組んで珍客さんも千鳥足

与呂志 凡九郎 柳宏子 与呂志

花道などいらぬ珍客句座に溶け さわがしい男珍客来る電話

禁断の実と聴かされてより林檎

リンゴの唄やっぱり齢は争えぬ リンゴむく指カウンターの灯が青

4)

工藤

40

萬 潮

的

V

珍客へ大阪ことさら暑くなる 珍客をとにかく先に風呂へ入れ 津軽弁わかりにくさ酒のせいでなし 珍客へ妻はコッソリ見る鏡 じょっぱりの固まり珍客の目が可愛 珍客へみんな忘れていた話 初対面こんど会うのはりんご 珍客の好みを妻が覚えて居 園 13 生々庵 太茂津 夕 凡九郎 好 11 郎

触珍客はきっちりネクタイ〆めていた 因珍客へ初めは泣いた子も交じり 地珍客の眼鏡を孫が取りにくる (八珍客の酒量減ったが気にかかり 川珍客も三八銃の重さ知 川珍客を賞めたらネブタの顔になり 川珍客は朝鮮人と間違われ 川珍客は蛸が苦手を思い出 川珍客はリンゴのような顔のひと 川恋人に似た珍客で燃えてい (住珍客も大宰も同じ津軽弁 3 好 太茂津 与呂志 郎

水

青春はリンゴの歌で始りぬ リンゴの木枯れると笑うチャッ りんごころころ都会の夢が楽しそう (天お見舞いの客がリンゴをむいて呉れ 地りんご自慢ずうずう弁がこぼれ出す **仏艶の出た分だけりんご高くなり** 川じょっぱりとわかるりんごの嚙り方 川過疎の村リンゴ娘は若くない () 闇市の思い出りんごの歌流れ リデリシャス母の好みを思い出 住或る出会いリンゴの類になってくる 青りんごそんな息子に嫁のくる 私の恋青いリンゴのまま終る 車窓から手が触れそうにリンゴなる (軸津軽弁りんごになるとまくしたて 一切れのりんごが食後を楽しくす ブリ 太茂津 千万子 紫 太茂津 水 岳 重 茂形水 夕 笑 花 花

五百円で出来る合本

78 冊綴じたものです。 一十冊以上かためての話です。 本誌の合本が五百円で出来ます。

ご希望の方は本社へ雑誌を届けてくだ 表紙はありません。本そのものを十二 出来上ったらお知らせします。 但 L



凄いね」と喜んでくれて、妻の心づくしの祝 い膳に此の日の晩酌のうまさは格別でした。 子供達は歓声を上げて「お父ちゃんばんざい。 を添えました。おめでとうございます」と。 て一三夫先生の速達。「十月の川柳大会が花 と薫風先生から電話。 も欲しいんやけど僕にはくれへんのや……」 正朗さん、 路郎賞やで。おめでとう。 岳人さんの祝電を追っ

たが感情の高ぶりのなかで、もどかしい夜汽 びひとしおで、上阪が待ち遠しいでした。 受賞式には娘に連れられ勇んで出発しまし 十月には還暦祝賀句会の予定でしたから喜 嬉しい日閉じた瞼に詩が湧く

駅まで薫風先生が出迎えて下さって「正朗さ ん、おめでとう」と強く強く手を握ってくだ 路郎賞眠れるはずのない夜汽車 久し振りの温かい感覚が心に沁みま IE. 朗

いた楯と賞状に万雷の拍手を浴びて万感胸に 自安寺会館での受賞式。生々庵先生から献

> ずつを先生方が書いてくださったのです。今 ません。 でも大切な記念として宝として想い出は尽き られ、書き初めは生々庵先生で、記念の一句 ほんとうに盛大にありがとうございました。 満ちた感激が今でもはっきりと残っています 朗朗朗集」賞を祝して生々庵先生が名付け

こもった祝福を戴きその上、 さんをお迎えして諸先生先輩、皆さんのお心 高の喜びでほんとうに嬉しかったのです。 ていただいた路郎賞。川柳の道を歩む私は最 十月十五日の還暦句会には薫風先生、 心眼に六十一の秋が澄み 還暦に花を添え 岳人 風

妻の目が子の目がみんな僕の目だ

でも盲人の私には苦痛を大きく感じることも 生きられない。つい過保護になりがちです。 は駄目だと思いながらも音と感覚に頼らねば 妻や子が何時も支えていてくれる。 瞼閉ず耐える苦痛が洩れぬよう 青眼の方が「こんな些細な」と思われる事 甘えて

堀 江

> そうとしても余りにも のですが、いま想い出しなどいろいろあった 妻の入院退院の繰り返 てくるのです。あの頃

え安らかな心境に戻っ

感激、喜びが大きすぎ

うにありがとう。 です。 記し、投句を続けてくれる妻の努力のおかげ であり、二十年の間コツコツと点字日記を清 のです。諸先生や先輩、周りの方々のおかげ ん。栞先生、水客先生が推薦してくださった TF. 路郎賞の栄光は私一人の栄光ではありませ 妻と二人で受けた路郎賞です。ほんと 朗 いのです。 だけ。ほんとうに有難 る。もう想い出は喜び

見つめてゆきたいと願っています。 々にも理解してもらえる句を作って、 出来るでしょうか。たとえ川柳を知らない方 の狭い暮らしの中でどこまで積み上げる事が 守っていてくれる子供等がいます。音と感覚 私はとても倖せです。それとなくじっと見

ない事に感謝しながら。 ライバルとして夫婦として日々の会話の尽き 林さんのお話などを思い浮かべながら妻と ファイトを燃やしたらおかしいでしょうか。 人三脚で「もう一度路郎賞に挑戦」などと、 人生譜柳は日々の風を見ず 一三夫先生にいつか何った事のある武部香

妻は月 僕は虫の音楽しまん

あるのです。静かに瞼を閉じれば苛立ちも消

īF. 朗



しでした。川柳が心の 周りに心配のかけどお 重い病気ばかり続いて びと感激の連続でした。

支え生命の支えとなっ

生かされ

る尊さ喜びは言い尽せ て励まされ、

生から「芳子さんおめでとう。昨年の正朗さ 落ち着かない様子。追うように電話が薫風先 甲斐もない私に「よかったよかった」と夫も と速達をいただいてびっくり。そわそわと年 柳塔賞にきまりました。お祝い申しあげます んに続いての栄光です。僕の推薦句ですから 三夫先生から「あなたの句が48年度の川

くないらしく「女親は嫁にやる事ばかり急い らはむっつりと黙りこくって好きな酒も欲し せたいと願っていた親心も、結納を受けてか うな川柳塔賞を受賞するのです。 で冷淡な」とこぼしていました。 "とうの立たないうち"に良縁を得て嫁が

とても嬉しい」と喜んでくださいました。

岳人さんや緑之助先生からも祝電。

夢のよ

も見せず「きれいなお嫁さんになったなあ」 切メモして私は追われる日々でした。 ながら荷飾りを出したり、式当日の事など 三人のお嬢様を嫁がせられたお心などを想 娘三人みな惚れられて嫁っちまい 一月七日出立ちの賑やかさの中で夫は笑顔 一三夫

> うに、正座したまま無言の夫が佗しさに輪を と、やりきれない気持ちを一気に ちゃん初子がいってしまったら可愛そう」と かけるようでした。めでたいって一体なにが の珠を失ったように張りつめた糸が緩んだよ のがやっとでした。朗らかな娘を送って掌中 嫁ぐ娘への父への思いやりに私は涙を押える 涙ぐむ娘。美しく着せられて最良の人の許へ と、そっと高島田に触れていました。「お父 子子

淋しさと別に胸がいっぱいでした。 めでためでたでひとり娘をもってかれ 嫁がせて最も長き夜となりぬ

いただいた薫風先生。川柳のおかげで得た喜 駆けつけてくださった岳人さん、会場へ電話 皆さんに心からのお祝いを受けました。空路 たのです。いずも新年句会では緑之助先生や 助さん、鬼遊さん等が祝賀前夜祭を、八尾・ きない私のために薫風先生、岳人さん、新之 彦さんに手を引かれて出席しました。上阪で 富田林・堺では合同祝賀句会を催して下さっ 受賞の私に代って夫が「もっていった」敏

江

堀

筋梗塞で急逝されました。「病気に負けない 早く知らせようと思いましたが、此の日に心 誕生日でした。主治医三代忠雄先生に喜びを で川柳を作るのです」と励まされていました 栄光と感激と深い悲しみが重なって忘 ません。 のは九月十日。 吉報を拝受しました

正朗の

と感謝いっぱい。受賞のとき芳風抄を戴きま こぼしていた夫も「ようこそもってかれた」 生活を送っています。娘を奪われたようだと も大切に川柳と暮らしたいと思います。 した。正朗の「朗朗朗集」とともに何時まで いてきます。娘も二人の子宝に恵まれ倖せな た」と。ちょっと恥かしいのですが感激が湧 女の『めでためでた』を引用させて戴きまし 思いもよらぬ方から「結婚式の披露宴に貴 芳風抄(薫風先生のお便りから)

っついているので正朗さん妬きまっせ。 付けて書いて下さったのですが、私の風がく かったです。芳風抄という名は生々庵先生が 井野迷路さんが最後に書いて下さったので良 生々庵先生が最初に書き、元海軍中将の福 れることができません。

橘 高 薫 風 選

温室で育った冷蔵庫のメロン 鬼面はずせばたわいない童顔 君が代もきっちり聞いて切るラジオ 羽曳野市 麻 野

さらさらと砂が手を漏る影が漏る

村

早

苗

凼

嘉 数 千代香 玄

流れ星秋がテンポをあげてくる べつべつの夢がとんでるシャボン玉 京都市 Ш 本 規不風

ハンストの腹へすこうし水が沁む踏まれてる球根に愛見え初める 富

廃船にパ 恵

笠岡市 木 遠

時偶に出しゃばって見るのも八歩けば後に坐れば横に妻が居る

水 7、十路 Ŧ

慣

友は来ぬ改札口ももどかしく枕を替えて新しき夢を見ん

八尾市

香

Ш

醉

17

歓声

風鈴

の音へ

満潮は海の充実揚花火一遍が持ち西行がもつ時間

金朝

封汗をかきそな金を入れの一番花は旅の朝

L

藤

甲

吉

顔

手四

·拭は汚れるけれど洗えます 【枚目の自画像描いた手術の】

111

の日戸

古

方

都

倉

求

芽

夫婦は生き残り 和歌山市 若 武 翁 雄

文明開化小姓はクラブ捧げ持つ が敗者の耳に近すぎる 唐津市 町田市 塚 内 素 紫 錆 石

自分あて絵はがき書くもひとり旅 なおる癖なおらぬ癖と分けてやる 大阪市 兵庫県 白 石

潔

山盛りのトー

つ二つは塔を見る マトに慰められてい

八尾市

高

夕

花

白百合を活けてプライドなど貰うあの頃の思い出つなげばレイになる

大阪市

河

野

君

子

新宿が見えて居ながら遠回り一円も一万円も珠一つ

健やかに兎が死んだ少年期歯ブラシのように少年整列す

綾瀬市

大

Ш

7

金

美少女の面影のこし

ママになる

原

宵

明

西宮市

針

のない

岸和田市

桑いる

原

道

夫

かくれんば急に世界が啞に

時計をもろうた誕生日 になる 尾 美 春 п 代 江 住

富田林市

児に菓子を呉れてた頃がどん底か 半分は土に埋った石に聞く 葬列や蟻は喪服を着て泣かず 翔びながら振る鈴 今治市 鳥取市 越

子も孫も引揚げ 残る水中花 高

ガム嚙んで年功序列認めない 和歌山市 坂 ロ V V \Box 木

片ちびの下駄で右へ右へよる 夕立の句 送り火をじっと見つめている閻魔 月ほめて私のことには触れ 仕掛花火おさん茂兵衛が燃えている 苦労した実話が亡母の壺にある 嘘ついて女いっこう老いていず おしばりをじっ 高ぶりで踏めば応える自動ドア 瓢簞の膨らむ日々是好日 立て前で当選本音で政治する れ合い 0 政治 濡 れてく屋根瓦 と握って小 が米価もてあそぶ 寝屋川市 出雲市 岡山県 高槻市 京都市 鳥取市 旭川市 唐津市 島根県 す 江いる 若 Ш 朝 両 桑 堀 武 III 柳 П 本 倉 111 原 江 砂 智 大 文 夢 博 潮 桐 芳 帆 洋 掬 白 公 桃 平 度 的 酔 友 花 F 柏 17 子 雀 水 満 7 里

心売るその気の金へ酔っている 海紅豆こぼれて罪など考えず ひたすらに慕うて生きるピエロです 駆足の世代交代待ったなし 行楽へ降れ降れ降れと雨蛙 中位の余生が欲しい日の疲れ 最愛と云うから他にも愛すらし 悪口は食べれなくとも酒のあて 荒ら屋にこの世を拗ねた知恵が住む 岡山県 稲 岡 何もかも虚勢と知った秋桜 病人が逆にはげます彼岸花 栄枯盛衰賑いも良し平泉 天国は予約も出来ず不愛想 活字眼に飛び込む若さかえり来よ 髪染めて妻職安の戸を叩く 波しぶき明日へ続く夢と佇ち 灯台に真夏の海が深々と ホノルル市 和歌山市 和歌山市 殺屋川市 大阪市 唐津市 米子市 岡山県 II. 前 西 佐々木 直 H 城 水 Ŀ 原 中 \mathbb{H} 北 回天子 七面山 英 寿 鵜 千万子 修 哲 di. 英王子 亜 福 īE 子 海 裕 史 保 男 弥 之 気のせいか蟬も静かに鳴く冷夏 偏人の工夫奇抜な味が出る かまきりの闘志借り物かも知れず たとう紙へ女の秘密たたみ込み 天皇と僕との距離に終戦忌 夕立のあとの心を妻にやる 仏の目すっと切れてる柳の葉 俺の手の天眼鏡は見てならず 霧の中から出て百年の知已戻す 訪えばもう別れを嘆く島の唄 分裂のストーリーならできている 原爆忌空もくだけて塵と土 Gパンに弾む若さを封じ込め

名古屋市

越

枯

高知県 大阪市 兵庫県

Ш 野

菊

野

大

武

太

H

白

李

岡山県 宝塚市

池

H Ш 村

4 笑

仙

コンベヤーに乗る足改札駆け抜ける 和泉市 西 岡

巻き上げた錨乱獲かたりだす

米子市

西

雄

17 蘭

ずば抜けたものを一

一つと野心抱く

柳五郎

2

2

1)

女 梢

母の感予期した様にズバリ当て

ジーパンのヒップは大きく揺れ歩く はがきの文字より距離感深くする 清純はとっくに故郷へ捨てて来た

山口県 鳥取市

高

喜

愚痴をきく母の扇の風静か 悲しさはゆでられて出る蟹の赤 やみくもに佗びしガルボの眉を引く 女手の気甲斐性東大受けさせる 和歌山市 藤井寺市 原 野 島 野 伊 勘 与呂志 都

揺れている足場が今日の仕事場さ、大阪市・清・

水

[i]

千世子 健

セットする女安らぐ美容院

ライバル意識わが年齢思えば消えてゆき

取り 耳鳴りへ夜が明けがたく虫の声 見ぬふりをして見届ける過去の人 抜き足で歩けば病室何か蹴り 愛嬌があって受けてる下手なうた 俯いた百合の心を真似てゆく ビートルズ聞いて育ったいい時代 かこむ宅地へ老いの青田守る 岸和田市 米子市 倉敷市 八戸市 倉敷市 岡山市 石 垣 野 F H 句昧地 春 方 花 登. 静 j 7 舟 子 H 峰

富田林市

H

美

代

奈良市 大阪市

H

カズエ

西

森 木

花

村

村諷子

羽津川

公

75

尾鷲市

渡

伊津志

木

T

代

国宝は土蔵へ欄間イミテーショ 天守からみる官庁街は蟬しぐれ 妻の首回る程度の月賦買い このへんが限度と分る汗に濡れ島根県 堀 その一瞬女になっ 相討ちにしようか夫婦の喜劇 紫の炎哀恋の胸に積む 木洩れ日へ小鳥の声を聞き分ける さまざまな別れにあって今日を生き 開拓の苦難しのばす低い軒 難民の子の笑顔が欲しい夕日映ゆ 耳朶の柔かき日に来た便り 蓑虫を手の届くとこ取りつくす どっぷりとつかって疑問のない怖さ 呆けていて阿呆になり切るむつかしさ お盆には亡夫も帰る孫も来る 冷夏また人間を試練する た少女の瞳 岸和田市 和歌山市 東大阪市 島根県 松原市 米子市 柏原市 尼崎市 時 野々口 行 青 今 佐 峠 3 見 дi 野 野 村 中 伯 ìI. 111 はじめ 小雅子 ゆう也 鐘 IE. 醉 n] としよ 美 U 4 紫 綾 越 朗 動 代 子 夢 7 路 珠 嫉妬する心の狭さ読む鏡 雨の七夕織姫さまのすすり泣き 幼稚園早くも英語で気をもませ 世の中をピントの合わぬ目 太陽を追わぬひまわりだってある 習わしが京の小路に引継がれ あちこちのお守り吊って交通禍 年金のくらしに妻が威張り出し おにぎりを注文する子夏休み 音痴でも合唱となれば高らかに 親泣かせヤングは今日も翔んでいる 親の意見と頭の中で衝突す 同輩の計は病臥の母に伏せ 紅少しさしたら元気な顔になり 夏の鏡に癒えし肋をおよがせる 一匹の蠅追うている孤独 一人三脚欠点連れて五十坂 和歌山市 岸和田市 兵庫県 島根県 仙台市 松江市 豊中市 青森県 米子市 津批川判 伊 藪 新居田 Ŧi. 干嵐 原 \mathbb{H} 村 仲 坂 藤 本 野 \mathbb{H} 家 尾 原 胡頹子 けい子 あいき 未 5 テ きく子 静 義 代仕男 秀 映 蚊 操 敬 子 史 枝 史 知 輝 12 美 声 步

盆踊り暮れぬ内から店待機 温もりを手にして帰る里土産 捨てた夢酒場の隅で想い出し 日の照らぬ夏に向日葵とまどいぬ 内職も家族旅行の夢があり 解きかけの将棋へ掃除機から追われ 飼った罰朝毎綱に引きずられ 独り言聞いてくれる空が好き 浮世絵の 若い日の俺が笑っている写真 草負うて戻れば牛がみな覗き 漫画には名士描きよい顔を持ち 内緒話小路にそれて持ち出され ハンデ持つ娘の縁組に胸痛む 雨傘が日傘にかわる梅雨の 回り道亡父の戒め落ちていた ビ料理あれだけ使えば甘い筈 一冊本棚別にする 岸和田市 和歌山市 岡山市 湖町市 唐津市 大阪市 唐津市 大阪市 兵庫県 唐津市 唐津市 あけ 岡 浜 原 宅 谷 増 部 賀 水 崎 本 中 金太郎 久仁於 禎 勝 3 清 風 悠 紫 美 さよ子 貞 四 頼 耕 3. 亭 女 7 2 実 子 郎 次 泉 浪 111 草

水 煙 抄

前月号から「

三人寄れ ば

河 野 君 子

に仕立てるあたり、心憎いばかりである。 よりこわい敵は自分かも知れない。自分を敵んな心の葛藤がよく現われている。七人の敵 すれば、自分自身の対応の是非に苦しむ。そ 恰もパチンコ玉のようにぶつかり合い、とも 玄関を一歩出れば、ひとりひとりの人間が、 玄関を出れば自分も敵になる

精一ぱい生きてる知恵はこれきしか

をいつくしむ女の情感が溢れている。同性と 々のあさはかな知恵を自嘲しながらも、自分 結局は日常的に流されてしまう。そう云う日 かなかにむつかしい。精一ぱいに生きても、 会にあって、知的欲求の芽を育むことは、な を頂いた。一見気楽そうな主婦も、繁雑な社 共鳴点を愉しむ川柳の一つとして、

> して、この句への共感しきりである 誰も居ぬとこで嘱託齢をとり

> > たてまえも本音もない尊い姿です。

うです。 もう誰も振返ってはくれない。それでも実直 華やかな椅子を退いて、嘱託の身ともなれば、 に働く、御老年のわびしい溜息が洩れてきそ 穿ちのあるうまい表現に拍手を送ります。

9 花

嫁った娘の箸が残っていた朝餉

この句の佗しさを、一層浮上させてます。 こよなく胸に迫ってくるのです。お箸だから 箸に寄せられた父の愛の甘さが、かなしさが、いた大きな穴をどうしようもない。一膳のお く。昨日まで食事を楽しませてくれた娘は今 日から他家のひと。ポッカリと父の胸中にあ ふと、お箸立てに残っている朱の箸が目につ 嫁がせたあくる日の朝食のむなしさよ。

咲きそうになると大事にされる花

に出会いました。 まう。作者も屹度怒りを感じていらっしゃる と人気がでると周囲がほっておかない。そん のでしょうね。風刺の効いた川柳らしい川柳 な世にやりきれなさを覚えながら順応してし さりげなく人間のエゴを衝いた句。 ちょっ

内面も外面もない菜っ葉服

終日機械と対話している汗と油、それには

さを教えて頂いてありがとう。 面外面には参りました。菜っ葉服のすばらし のあたたかい瞳、 そんなご主人?に仕えていらっしゃる作者 妻ならではこそですね。内 1 出

平静を装う煙草に火がつかず

ものだと感じ入りました。 ます。何気無いところにも、 は解らない男性の一面を垣間見た思いが致し された句で「煙草に火がつかず」と無理のな い言葉が実によく生きている。女の私などに 微妙に動く人間の心をまことにうまく表現 川柳は存在する

肩越しによその不幸を覗き込み

と思います。 穿ちを強くされ、しっかりした佳句になっ の時の心の動きがよく現わされていて、 句であろうかと思います。「肩越しに」でそ れるのですが、その中の一人としての自嘲の 一読して無責任に騒ぐ野次馬の姿が想像さ なみ

気が染まぬ仕事で釘を打ちそこね

よく言われますが、身近なことから作句する と思います。実感の句ほど強いものはないと は、このような句のことを言うのではないか ことの大切さを改めて教えられました。 その作者でなければ出来ない句、 と言うの

課

2 やげ物

西 JII

選

店と土

地

えまでほ

られ 餅を搗

るみやげ

お みや

げ

厭

to

す 80

いてく

唄

思い

させるみや

物 n 物 お

みやげを選る楽しみも旅なれ

みや

ch 張 1+ 0 物さも嬉 度 E 中 爱 0 しそうに子が開き 栞が引き立 児 1 2 4 14 てる 物 友 2 故 2 鄉 40 0

げ

物

向 出

軒

妻

0) 14

旅

天

彦

0

土:

産 う

座を持っ

て長

話

みやげ売る声にその 2 2 # が娘に持たすみやげはもち切 n 3 笑 顔 かり 包 地 のなまり みや 聞 夢 西华 夢 2 母 夏す 3 や 休 分け 2

故

郷

0

2

40

げは

甲

虫

喜

酔

どの店も変わりばえせぬみやげ物 みやげも土 やげ づくりの を運よく抜 そっ ± 地ののれんで買うてはる 産背負って母が来る と寝 1+ た子の たみや 枕 もと け 物 本蔭棒 早花 春 苗 甲み 真 磁 i. 子 0 園 から 否 げ 1 物か から 12 物 偲ぶ げ 1 0 b 7 まりは旅 0 遣 63 故 出 帰 10 40 孫がとんでくる 貰うみや 1) た 郷 0) 1) 0) みや 粟 みや 0 お ar. こし げ 14 14 明 物 物 書 物 勝 虹 不

おみ手税

関

み里家

で

鯛

3

7

17 1)

物

買

う

0

12

疲

扎

旅

終 け

みどり

15

スツアー棚にぎっしりみやげ物

カズエ

泊

H

旅

弹

んでいる家族

七

面

泊

H

7.

供

0

よう 足

K

妻

は

山雲治

泊

て

は

満 なら

湯

0

H 一日やろ

む

1)

掬

内 産

10

は

内

結

0

みや 釣

14

土旅

物

駅

7

求

8

3

軽

好きの

隣

みやげ

0

借

1)

みお

みやげを貰

0

て返しに一

思

4

14

物に

迷

うている宿

の下

別にもち がふえ 物 理 駄 案 どんたく 弘、 ゆうや 勝 木 秀 美 鱼 朗 由条 飲まんのにジョニ黒と云うみやげ物 お お荷物に ±: 童 H 産 1 心 目はみんなおんなじ紙袋提げ 物買う気で出かけ 櫛 を甦 だけを土 なることでしょが気持です 佳 b せ た 産 子 10 ストリ 0 木曽 2 4 0 ッププ 旅 げ 八文銭 規不風 青丹子 綾 胡頹子 義

珠

0

用意

to

7

出

スト B

0

この

1

まで

泊 知 て 3

古 早 義

一雨

続 泊

<

泊

H

楽

Ĺ 朝

泊

H

旅

0

範

囲

は

れたも

0

方苗美郎

物より it してますとみやげ H げ 物 世 持 残る記念のみやげも 1 たせて嫁に箔をつ なる気気 10 みせら 0) る 2 長 け 60 旅 る 古 方 進 方 泉 大 2 出

か

0

人

を

+ 0

産

物

à

0) 0

10

2 ス

40

げ 見

と帰

み紙 た父

雅 越

1

平 風 子 路

伊津志 文 U 白 平. 李 0 和 みだれれ ちさい義 2 40 げ 1: IF どれ 物 物 限 製 みや 度 造 月 げ ば H かい を 18 同 スポ じ包 確 か

め

3

登美也

餞 别 # 理果たすみやげが手に余る す 天 気に なるはみやげ 物 素身 素 郎

石

頼 ま n たみや げも交ざる旅

泊 H

一汀 夫

石 JII 侃 流 洞

明

-48

猫

63

泊

H

1

迷

路

泊泊が

H 7 H

1

なド

ラ

7

あ

文

二大平朗

がだ

H

7

0

泊

は

15 祭 ŧ

ス U

0)

研

修 1)

10

湯に

不 方

旅

7 j

11

L

11 3 中 3

初 一旅 E

T) 旅泊

H

あ

1+

Z 1) E

とり

こ云う癖多

10

育規綾

インタ

7

0

3

字

を見

挑 巨思

佳_

泊鞄人泊泊

会

泊

H

0

旅

7 忙

ら日

11

1

ち th

帰

1:

登美也 青丹子 隼

泊

J 親

ス

杯

15

ス

10

詰

泊

H

安

な

J.

0

旅

行 10 ds

久仁於

+

ボ再一一子満一 一 枯 一 一 泊 0 ち 泊 泊 泊 泊 1. 足 H H 記 1) H H H H J. HH 穴 to 義 泊 H 質 泊 場 う 理 1+ 箱 を * やる気 泊 H II H 探 果 H to 0) to す かい H 旅 0 た夏 44 0 足 0 欲 旅を決 0 を 足 里 7 L ++ b 休 人 VD Li な す i) t 夜 2 旅 80 越 勝 友 美酔 郎 進 明 年 無 空 家 情 金 0 # かに 記 旅 簿 かい 風 家 泊 泊 泊 邪 泊 事 泊

な

背

60

0

た旅

H H H

旅

を

th à る 旅

1 0 H

降

1)

0 U

保

足

伸 to

3

胡

ス なの は 今 泊 年 12 t 不 泊 我 H 思 から 0 家を 10 H 切 足 程 恋しが tL 3 度 す 旅 蓉 程 1) 1) th 代仕男 どんたく 不 11] 1. 0) 好 意 红

儘

な

旅

0

慰

龙

会

0

湯

U

たる

邨

大楼

を

忘

11

7

宿

0

膳

美

穗

H

描

ŧ

3

1L

3

泊

H

婚

0

Ш Ш 团 茶 選

鑑や夫謝今悪赤癖女 、へ同了悪亦癖女 の恩に が提い四 癖会知癖灯つ十 癖と知恩る出見か り師祖いば なれ癖買 で様 つの母う は立ち寄る密ななななななななない。 癖のち立 も口に 真似で 癖が か 体 7 みないると 111 ませい 喜木忠 方勝 子魚夫大一 明風珠於

本隆棒 ゆう 路 也 一般あり 南聯辯 僕に 無 河 1 所院仏で返っ 片づけら あ し寝 t: の酒 のか 残りを解析が 子れ かい て固つ真 相ぬらいて 3 L 3 似 母癖れ

のおいて子のですって子のの解はテレビで覚えのの解はテレビで覚えのの解はテレビで覚えている。 い覚七癖砂ん 0 の軽さ 佳頃蘚 えて はか をか貫 をさら、 魅 魅力が名刺 もう をまきちら \$ tL あ hi ぬ老夫 ちっぷうもの 0 7 杜 越 1) 112 7 カ大胡ゆズ類う 胡ゆーみ道越古美武登実 ひ虹 回洋 類う ど 天 カ 恵 水 也 男 で 汀子 々 郎工柏

用何 癖 君大く爪酔 本 0) が往せをう の順ほ 張 な 癖 4: あむど \$L 10 る字やり 癖 0 天麦地男 人真 強 1 0 [11] o話題に通いなるない。 もなつかした。 を含る癖が 3 + \Box 1: ti: 4 か 背 背 1 負 通 L な 0 筋 恋を出 3 7 夜 足 īE. 止すの舞 床 聞 h 柱 ž ず 癖席状て 花青美 軒太楼 子子 惠楼 佳 3 悠花 実 1 亭

男

佳

役目

H 朗

思います。この言葉は、そっくりそのまま短 ればと願う私にとって、 れた短い言葉『限られた版画に無数のイメー てみて痛感している私である。 いことを当教室十二年間の足跡を振り返えっ 文芸に取組むものの心に通じ合っていること めの厳しい限界としての一つの条件であると ジを刻り込むことによって無限の世界が創れ だと私は感銘したことである。 句を小器用に、 如何に努力したかを重視せねばならな 画家丹阿弥丹波子 上手に作ったという評価よ 狭さは内に籠めるた 女史が謙 虚に述べら

留守居役犬にまかせて昼寝する 持上げる謝罪に巡査許し呉れ 部下の尻ふくのも役目管理職 放り出された役目なかばの粗大ゴミ 雨ざらし役目なかばの粗大ゴミ 留守役は犬にまかせて高鼾 朴訥な謝罪へ巡査の顔ほぐれ たけし 次 義 美 峰

> 馬鹿という役目を神に授けられ それぞれの役目持たせて桃太郎 切札の役目なんだか頼りない 老人の役目もありて丸く住み 定年を趣味に生きなん役目果つ 役目とてわれには重く痛む胸 わが役目昼の仕度に秒を読む 嫁かせて親の役目が一 子育ての役目が済んで趣味に生き 自信持ち役目果した日の安堵 人生劇犠牲バントという役目 (ピエロという役目神さんがくれはっ (桃太郎それぞれ似合う役目決め (役目です献立表へ秒を読み 役目終え余生は趣味の彩に塗る (三女も嫁かせて役目が済みました) 余生にもほどよく役目ある平和 重過ぎる役目背負ってトボトボと 自信満々役目果した日の凱歌 金役目の 金重い役目へ軽すぎる 金役目の重さほどくれず すぎる 一つ終え た誠 同健 房 答 3. 同福 テ II 子 拍 2 12 留守番へ電話受けるを重荷にし ミカン採集役目果してお礼肥 長い役目ご苦労さんと来る定年 役目上と満更でもない顔してる お役目ご苦労さんと乳房たれ 社長からじきじき仰せのいい役目 年の功仲人役へそつがない 年の功人をそらさず花咲かせ 世話好きがやめたい振りで役目継ぎ 躾する親の役目に過去おも いい役目冷たい視線浴びてい 子守役気軽にうけてもて余し (お役目ご苦労さんと定年が来る (役目ならと満更でない顔作る (社長さんのお声がかりという役目 しなびた乳房よお役目ごくろうさん) 口下手の留守役受話器もて余 いい役目妬ける視線の矢がせめる 年の功役目与えて花持たせ 世話好きが困った顔で役目受け 役目果した蜜柑の根へお礼肥 いる [ii] 八文銭 II 静 同な

2

小 和 子 句味 [ii] 地 50

寄附集めこれも役目と夫出かけ 領いて役目果せたお茶の味 (躾する親の役目へ過去浮び (恙なく役目果したお茶の味

寄附集めこれも役目と夫多忙 子

まだ役目あるぞと老いの意気高

千同

子

風鈴の役目を冷夏があざ笑う)

役目ある仕合せ病床にて悟り

子に任す手伝い祖母がやりすぎて

静

枝

実を結ぶ役目果して花褪せる

iii

子に任す役目を祖母がつつき過ぎ

朝寝坊起す役目は母のもの 起す役目は母と決まりおり 役目ある仕合せ病床に教えられ 風鈴の役目果した秋の風

勝

美

世話好きのつぎつぎ役目持ち込まれ 煽てられ善人役目を負わされる 煽てられ善人役目を背負わされ 世話好きへホラまた役目持ち込まれ) īī

酔いどれを深夜のパトカー乗せて行き 見張り役泳げぬママも狩り出され 歯車の役目居眠り許されず 鵜飼の鵜そんな役目に甘んじる 役目果し退陣の言さわやかに 嫁かせて役目済した日の空虚 調停の役目の重さ嚙みしめる 役目なら見て見ぬ振りもしとられず なにか役つけて置かねばうるさ型 子を寝かせ母から妻の役目待ち ピエロになる役目もあって座が和み (役目果したさわやかな退陣の 酔いどれを運ぶもパトの役目です (うるさ型だから役目をつけておき (うるさ型へなにか役目つけて置き (寝つかせて母から妻へ役目替え) (実を結ぶ役目果して花弁散 弁 同未同幸 ii] iii 同慶 知

佐 彦 役目もう終えたか姑がぼけ初め愚痴を聞く役目もふくむ交際費 好きでした役目を思に着せている 役目とは云えご苦労な蛇探し 役目です満員電車の尻を押す 気の重い役目破談の使者に発ち ライバルが出来て役目が重くなり 好漢い 毒物の鍵持つ役目重く持つ 古顔になって役目がやっと来た 役目とは云え妻子には見せられず 役目だと割切っている鞄持ち 常連で役目ないのがお茶を汲み 新幹線でとんぼ返りという役目 指の怪我更めて知るその役目 おかしさを役目の手前苦り切 指の怪我指の役目を思い知 ま憎まれ役を買うて出

胡頹子 柳同同保五郎 夫 同同武同同 代和

辻褄を合す役目が重すぎて ホステスの戸籍調べは下戸 月給のうちだとはいえピエ 宴会の役目下戸では気がつかず の役役

美

同同露

杖

消防の役目へ高所恐怖症 今年また亡夫の迎え火焚く役目 警察手帖出さねば役目つとまら それなりの役目こなして幾山 [II] da

同同瓢同同英同同寿同利同

7.

1.

嫌なこと敢て云うのも役目柄 役目でも手心という余地はあり シャツ汚す役目と洗濯する役と

太

役目上今は云えないこともある

余韻 山県倉敷市下津井 10月20日締切(十二月号発表 一九一三四 本田

名そして郵便番号も書くのが、礼儀になって 何某様でよろしいが、差出人の自分はどんな いることは、川柳をたしなんでいられる方な ことがあっても、〇〇市〇〇町〇〇番地、 り、郵便番号を探してやっとわかる、 てない、姓もない、返事をするのに名簿をく 昔から宛名の方は有名であれば、 わかりきっているので、書きづらいか 自分の住所、氏名、郵便番号は自分 だけで郵便番号も書 の市 という 姓 40 柳をやっているものの、 る年の年質状も亦然りである。おたがいに川 こんな気持にさすことは洵に残念である。 つづけ文字で判読し難い場合があるからであ は必ず判を捺すことにしている。自分勝手な ることになってしまうのである。それで、 書けないようじゃ後廻しにして、 して大方の猛省を促す次第である。 も知れないが、 之は書簡通信の第一課である、が敢て、 暑さのお見舞をする、 名簿をくらなければ、 和やかなふれあいが エチケットにこそ。 時機を失す 草

工 " ŀ

住所も〇〇市、

尾

下手は別として、入れて下さったのは、一つ しく思った。しかも夏の風物の一句を上手、 の銷夏法として有難く頂戴した。 今年も暑さのお見舞を沢山戴いて、 大変處

次第。之は全く失礼である

今度は差出人の住所氏名の判然としないのが 憂き目を見ることがある。 それはそれとして 名は、はっきり書かないと往々にして返戻の いのには驚いた。之はエチケットである。 最近は、バイトの学生の配達の加減か、 3ji ら常識である。

51

恵二

朗

大 萬 JII 柳

甘 入選発表

投句総数 儿 三百五十六 JII 村 好 旬 郎 句

走馬灯甘いロマンがかけ廻る

たっぷりと甘味に浸った里帰り 花

義理という弱味が甘い子に育て 甘えまだとれず独立あやぶまれ 米 子 美 佐

霊峰を甘く見ていた大惨事

坊ちゃんで育った甘い設計図

和歌山正

博

甘くともわが子を思う鞭は持ち

和歌山 武

雄

裏のある甘い言葉に踊らされ

岡山

千代香

思い出の甘さひとり灯を支え 古稀近く時々甘い夢もみる 米子千 倉 敷 方 代

甘い香の漂う方に母居ます

おもちゃ箱親の甘さが溢れそう

和歌山

子

東大阪 美

子

好きだから甘い言葉に酔っている

和歌山 佐代子

和歌山三男

女には甘い方だと立つうわさ 嫁いびりしても孫には甘くなり 甘辛もじっくりしみた喜寿の箸 兵庫ゆう也 米子雄 米 子 美 朗 Ш: 17

貴方だけ同じセリフが甘くなり

美乙女

当てられて甘い取材のメモ終る

富田林

優

距離つめた女甘さを置いて去り

東大阪 没食子

学歴がつい世の中を甘く見せ

不惑まだ男は甘い夢に生き

地に落ちてからの世の中甘くなし 物腰の低い銀行に無い甘さ

ひろ子

甘い顔したら犬でも尻尾振り

甘言に弱い女の泣きばくろ

河内長野 喜

酔

甘辛の道知っている老いの坂 にわか雨甘い二人にしてくれる 大阪ますえ

七光りに甘え正業身につかず

宮春

江

子.

手をつなぎほのかにあまい老夫婦 子の親になっても母にまだ甘え 大 阪 満津子 大阪きくみ

甘いパパ教育ママがはがゆがり 一人子へ甘い辛いのなすり合い 東子悠 神 戸 どんたく 泉

積木の塔築き自惚れていた甘さ 耳よりな甘い言葉に罠が待ち 神奈川と金

甘い父きびしい母で素直な子 甘い嘘知りつつムードに酔うている 甘言へおんな迷うた夜が憎い しくじっていても考えまだ甘い 和歌山としよ

> 甘い逢瀬刻む秒針妬けている 愛一途甘い流れに逆らえず

禁断の木の実は甘い匂いする 振り出しの甘い誤算にさいなまれ 過ちも我が身となれば甘くなり 親子でも甘えゆるさぬ芸の道 大田 羽曳野 吐 富田林 花 美乙女 来 梢

一高株式会社

と技術 誠意

甘い過去あって静かに老夫婦

い顔見せたら貸せの判押せの 句 大阪 没食子

Ħ

い汁吸わせた側もある誤算 句 T H 軒太楼 知

Ħ

辛酸をなめた苦労に出る甘味

第

四

寝 屋

JII

市民

111

III

柳

逢うてきた甘さが枕寝つかせず 選 吟

羽曳野

昭和五十五年度第十一回

以下略

ひと息

十月二十五日 三句以内

H

昭和 五十五年度

ベストテン 子梢 (八月現 Ŧi

Ŧi. Ŧi. 富田林

和歌山 和歌山 阪

-0 九八 右道

四

武軒吐雄 太雄 楼来々 Ξ

Ŧi.

A 九 和歌山 寝屋川 Ŧ ш 阪

和歌山 塊 昭和五 投句先 - 593 十五年度最終回 きっかけ」三句以内 締切 十一月二十五日 締切

藤井一二三方大萬川柳係 堺市堀上緑町一—三—

欠席のため、川柳塔賞は大坂形水、 されることになった。詳細次号に。 ▼路郎賞と川柳塔賞の選出。 伊藤茶仏氏の句碑が十一月二十三日に建立 柳 塔社常任理事会 戸田古方氏病気 (九月四日 大坂形水氏の提案により、

専任を辞退されたことへの善後策ほ 黒川紫香両氏の協議で決定する。 ▼不二田一三夫氏病気のため編集の 出席 中島生々庵、 若本多久志、

会 B

寝屋川市立総合センター一階会議室

11月2日(1)一時開場

出句締切

時

話 場 時

控える

波

三千子 史

タバコ

高

鬼

選 選 選

星

久保田

▼なお56年度の川柳塔賞選考委員は 西尾菜、 水客、 児島与呂志、菊沢小松園、 島居白宗、 黒川紫香、 香川酔々、橘高薫風 川村好郎、 河井庸佑、 若柳潮花、 大坂形水、 野村太茂 阿萬萬 正本 西田

席

題

当日一句発表

Ш 橘

本

翠

各題三句まで

ためらい

*

会費 五〇〇円 出句は出席者に限る。

他賞品を多数用意しています

ショッ 梅士 番地 3 古さま 百貨店で a ₹ (06) 346-1201:ft

▼松江市で開催の同人総会へは常任理事つと 史好氏高杉鬼遊氏、香川酔々氏の四氏となる めて出席のことを申し合わせる。

黒川紫香氏、

谷垣

53

柳 界 屎

原稿締切毎月末

茶仏喜寿記念句

碑

前十時から長野市の長野県 会は十月二十六日

(日) 午

〒923小松市本町

前十一時から東京新富町 化賞授賞式は十一月三日午 柳大会並に第十五回 ·昭和五十五年度文化祭川 柳文

▼第一回県民芸術祭川 印刷会館で開催 柳大

で開催される。 西尾栞氏が祝辞を述べる。 柳大会は十一月二十三 正午から小松市向 、投句は十月末日し」藤井比呂夢選 本社関係から 木村喜見城選 良行選 路也選 無風選 ▼路二百号記念川柳大会は 勤労者福祉センターで開催 半から宮城県婦人会館五F は十月五日(日)午前九時本第二十九回東北川柳大会 鉄環状線玉造駅集合。 会は十一月三日午後一時国 大ホールで開催 分館一階研修室で開催 神奈川県立青少年センター 第八回歴史の散歩道吟行 二軒茶屋とその附近

2部記念句会・祝宴

極高

並

各題二句、こ

会費千円、

祝宴三千 同

新

人

紹

介

西

H

松園・文秋

夫

清

松重

柳宏子

推

施 司

道標とお弦灯篭 妙 》法寺、 久保田以兆選 熊野大神宮 湖風選

14 Ŧi. 法明 深江稲荷、 雁塚 較内千代子選 笠縫神社 古啓選

▼呉市秋の文化祭川柳大会 主催歴史の散歩道川柳塔社 間国宝の談話あり。

各題三句、

心える

各題二句出句締切正午、投 ・出張・メモ・叛く。 ・出張・メモ・叛く。 ・出張・メモ・叛く。 本通四丁目六―七中津方串十五日までに〒737県市 句は五百円封入の上十月二 かつ川柳会宛。 一月三日午前十時から呉 一四回串かつ川柳大会は

十一月三日午後一時から米 賞受賞記念祝賀川柳大会は ▼佐伯越子全日本川柳大会 兼题 子市東福原の大和会館で開 燃える 虹舞 ini 句会費 能 适 西 居 居 民 石 百 円 小河藤林村井 明東部選選 由多香選 日満選 常 無風選

は八月五日から十一日までは八月五日から十一日まで

東北の四大祭を見物、 ねぶた祭にはびっくり、

殊に

まつりの数倍の盛大さだと

111

一上上

一回の郵政人川柳大・紅氏(松江市)は

常任理 事 紹 介

市 谷 垣

史

好

iti JII

八 松

尾 原

袋がすりきれる 福田保子 石井 雅水 想親宴二千円。一683米 局は一020盛岡市新田町 きゃら木川柳会石垣花子宛子市旗ヶ崎二区七二五の二 入の上十月二十日までに。 保の四氏だった。由多香・小西雄々・清水一 選考委員は河村日満・小林 く不安 門脇かずお 同 病院の臭いに慣れてゆ 第四回茗人賞は左記、 〇-二五佐藤勝士方へ。 ·全国鉄川柳人連盟新事務 再起の義足すり上げ 投句は五百円封 やめ池桃山荘へ会に八月二十四 好作家ぶりを示された。三位の楯を獲得、川柳塔 のちの ▼高橋夕花さん(八尾市場造りに懸命であると。 移動、五十七年国体の競技都市開発部公園緑地課長に、小林孤呂二氏は松江市 句会に参加、朝・椅子・いは川柳新京都社の誌上共選 は松江市開発公社工 ▼舟木与根一氏 (松江 智一水氏と交歓された。 新電話番号07437. ·草深酔升氏(生駒市) 2082番 題に挑戦し、 四日奈良 今治 川柳塔の 見事第 松江市 のあ 越

頁の広告の会員名、 純刀は鈍刀に、また六十一 来は神輿に、後から一行目 八月号七頁後から二行目神 一句目は浦野和子さんの句を前号三十一頁中段後から 一と訂正お詫び 橋元美

本 九 月 句

会場 金 属 会 館

八日 午 後 六 時

順なきょうこの頃である。 が戻ってきた。ここ数日は雨が多い。何と不 九月八日、朝から降ったり止んだりの空模 から秋へ直行かと思えば、 ひととき夏

に続いて、 喜ばしいことである。 幕明けは、黒川紫香氏の柳話である。先月 「出会いについて・パートⅡ」で

心配された出足も、七十三名と好調で、

句を紹介しながら、川柳を通じて心のふれ合また、島根県堀江正朗氏との出会いについて い、出会いを語られた。 遠来の客、青森県工藤甲吉氏との出会い、

述べられ、いろいろな人との出会いがあるが中心に、人間の心と心のふれ合い、出会いは中心に、人間の心と心のふれ合い、出会いは声の湖をはじめ、台湾でのバスガイドの話を を有意義に過していきたいと結ばれた。 ふれ合いのひとつひとつを大事にして、人生 また旅での出会いとして、熊本・琵琶湖 今月の月間賞杯は、松本凉一氏に輝いた。

河井庸佑記

進行一柳宏子·記録

吸江・健司・千万子・糸葉・小路・蘭・翠光新之助・萬的・千寿子・きみ・綾珠・好一・規不風・桐下・一二三・紫香・水客・潮花・ ・生々庵・重人・敏・滋雀・善紫・千代三・ ―与呂志・育園・弥山人・雅風・花梢

好郎·美幸·寿子·岳人·琹·庸佑(八月·文秋·凉一·雀踊子·入仙·鬼遊·小松園鎮彦·天笑·幸太郎·凡九郎·薫風·洋敏 子・幸生・形水・喜酔・茂美・憲祐・恭太・みずほ・瓢太・太茂津・夕花・柳宏子・英・右近・白宗・頂留子・眉水・山久・文二郎 信治・酔々・柳杣・柳伸・度・智子・茂子・

木 幸太郎

忘れ物きっとしそうな今朝の雨 にれ物きっとしそうな今朝の雨 では持ったが傘が見当らず でれ物ない日の夕陽美しい 忘れ物めっきりふえて来た馬齢 やっぱり齢かと互いに笑う忘れ物 忘れ物そんな齢かいなと思う 神様に忘れられてる長生きか 忘れ物封じのコヨリさえ忘れ 奥さんがよっぽど恐い忘れ物

庸信花吸天柳幸潮鎮涼滋糸滋鎮 佑治梢江笑子生花彦一雀葉雀彦

不渡りを重荷とせずに生きてゆ

他人事でない重荷は又妊み

自分には重荷と知った廻り椅子

追善の言葉が重荷になっている

忘れ物得意で敵を作らない 忘れ物表事に逢う日を待つ女 の青 印鑑を忘れた役人遅刻する 忘れ物さがす通訳まで頼み 忘れ物からアリバイが崩れだし

引取手ない忘れ物部屋ふさぎ 紛失ですんでいたのにとどけられ お坊さん慌ててお布施置いて去に 折角のみやげそのまま置いてくる 忘れ物取りに行ったら高うつき忘れ物するなと言うのを忘れてた 忘れ物の話でなごむ老夫婦 帽子まで忘れて届けて貰う老い 鍵かけてから忘れたこと思い出し

藤 入 仙

口癖はみなの重荷にならぬ人 伝言板少し重荷になってくる 金バッチの重荷忘れた様に見え 実印の重荷を知った日の不安 家計簿がパンクしそうになる重荷 運もある名門校は重荷でも 有り金を使いはたしてから重荷 酔っぱらい重荷のように届けられ い荷は持たぬぞ俺はアルバイト

やっと重荷おろせば人生の下り坂 善健生水柳宏 常司庵客子 右 近 千潮花吸醉 万 子花梢江々 重右

千万子 生綾眉善き庵珠水紫み 柳右綾萬花洋宏子近珠的梢敏

- 55 -

教育マ さわやかな顔で重荷をかばう妻 上役の視線へ重い荷をかつぎ 子と孫の重荷になった再軍備 嫁き遅れ抱えて肩の荷が降りず 重荷から逃れる夜の汽車に乗る 重荷でも中流意識の家に住み 重荷とは言わず肩こり訴える 笑うのが重荷になってきたピエロ 恋の重荷いつしか外したペンダント エリート 細腕のパートでローン軽くする 落ちぶれた僕には何もかも重荷 後戻りしてから重荷になってい 重荷とは見せぬ口笛鳴りそこね 切札を出してしもうて知る重荷 生活の重荷の背なにハリやいと 重荷連らねて人生の列車往く 自棄酒に養子を巻込む古のれん マの愛を重荷に児が拗ねる の自覚重荷になってくる 重荷ポケットべ ル が鳴る いる 柳宏子 千万子 天吸 千代三 千代三 生々庵 鬼文糸雅萬 育

高 杉 鬼 遊 選

拍手した方を前座は拝みかけ

栄転の重荷かついで空の椅子

口止めをされて重荷が胃にたまる

故郷帰り西瓜二つを持て余し

英

客

雀

点

出来の良い前座でトリと較べられ 客よりも師匠を前座気をつか 大物の前座へ候補者小さく見え 真打ちも前座も新世界育ち 笑わない客へ前座は笑わない ふと求人欄をのぞきこみ

幸太郎 敏 iI.

受けすぎた前座が掃除を叱られる

妻の掌の上で前座をあいつとめ

お喋りがすぎて前座が叱られる

社長の芸引き出す前座うますぎる 重い石抱いて前座は背伸びする 父の計が届いて前座目を覚ます 下足番だけが聞いている前座 前座の時から悪かった女癖 師匠より若い前座の方がもて 前座まだ心中ものが不得手とか 前座からキラリと光るものを持ち 座布団を替える前座の目にファイト 古里にまだまだ遠く居る前座 小娘のスターに仰々しい前座 ルスセンターばかり廻っている前座

柳宏子

遊秋葉風的笑

大食いが前座仲間に一人いる 子期しない拍手前座吃り出し 笑わない視線が針となる前座 お手洗い前座のうちは混んでおり うまそうに食べる前座は空腹で 前座済む頃にばつばつ客が来る 前座でも天王寺村はくじけない お袋をはらはらさせている前座 おかわりがいつでも待っている前座 前座まだ上方にないアクセント 前座まだ四国訛りが少しあり 好 恭好入 水桐酔善

太茂津 千万万 lifi 栞

客席の美人が見えて来た前座 人の字を三枚飲んで立つ前座

本田恵二朗氏格高薫風氏と

の前座やたらと打つ扇子

みずほ

時一正午)を開かれることになった。 を全十回。 中之為・ こし「現代川柳の大要」「川柳の歴史 「川柳とはどういうものか」から説きお 全十回。問い合わせ、川柳眼のみがき方」 10 月 6 なお講師は橘高薫風氏と片岡つとむ氏 センター 川柳入門」 朝日新聞ビル五階の朝日カルチ H から 電話〇六一二三二一五二 H (毎週月曜日午前 カルチャー 「実作指導」など 申し込みは北区 センタ

善紫郎

17

廋

太郎仙客

本極りとなりました。 栄の至りと受諾しまして、 署長が来訪あって申され、私としては光 限り)を建立したいから諒承願うと、 その前庭に句碑(足跡を残そう砂のある が十月中旬に新築落成式を行うに当って Ϋ́ 県北の真庭都勝山 町の勝山 いよいよ建立 [11]

文

人

智 敝

子仙郎

寺(国宝)にも建立の運びとなり、 人生に花が咲いた思いでいます。 く有難いことが次々と湧いて、 文字は岡山県警察本部長が染筆されま 真賀石で畳二枚大の大きな碑となり 当児島の熊野神社 (国宝)と連台 長い 炒 111 柳

まれず

選

今反発せねば愚かな負けになる 反発が新世 反発も許されている血の濃さに 反発はカレー二杯でおさまらず 界の世明かも

少年の反発耳を突き裂ける時々は鏡よ反発しておくれ 消ゴムへの反発紙が破れて来 反発をしても食事に降りてくる

反発をする階段の音になる かまきりの反発が男に見えてくる 反発の兆し敬語が増えている 親切へ反発したいときがある

切る反発のガリ版 小雀水憲花萬夕 踊 路子客祐梢的花

大茂津 方子 祐梢的花 反発は無言不気味になってくる 反発の呼吸静かに灯が動く 反発の動き底値でまだ喘ぎ 引き金を引く反発をまだ知らず 反発へ立つ日は風をふところに 反発のもとはふたりの過熱かも 反発か橦木を止めるにも力 反発へ父の平手が欲しかっ反発にも個性があって憎ま の反発からの丸坊主

柳

反発のまりは童話とたわむれる 反発を重ねて夫婦になってゆく 多数決といえども反発したくなる つにない無口反発かもしれぬ 一歳もう反発をする構え

船の反発それきり降りてこず

雀踊子 千代三 幸信小眉糸新之郎治路水葉助 潮滋 敏 客 花雀

雅柳宏子

孫のガールフレンドに反発しても始 反発はしたが置手紙は書かぬ ある反発早稲田の文科中退 相手はいつも僕自身 くと私ひとりの反発で

まら

da

題 信心 岩本 雀踊子

選

寺参りにやすらぎを持つ妻となり 茶柱が立つと信心薄くなる

重文岳

人秋人

信心もすぎると馬鹿に見えてくる じわじわと信心利いて来た話 信心の積み重ねがある老夫婦 お大師さんに頼んださかい大丈夫 信人をしてから人間臭くなり おみくじの紙一枚の字を信じ 信心でもしようかあちこち痛み出

与呂志 頂留子 好

千代三

桐

7 ょ 丕 お

発九月十八日、

大阪市生野区生野西三丁目

H

一三夫氏は糖尿病にへ

ルペ

スを併

知

せ

三夫氏は病気などしたことのない 一番五号今村病院五二一号室に入院された。

人だけ

馴れぬ病院生活に

順応出来るか、

ラ 濃 ち 加 1 2 茂 す は かい む 人 程 た 間 ょ び b に 負 寄 < 17 付 7 7 帖 2 2 7 n n 15 Ł П t n

オ J 1) かい 落 ち 7 1 0 音

床

甲

7

袁

0

上伝

監

督

K

な

3

2

は

ょ

II

ど

野

球

好

去

川柳

大

野

勝

記(戯作)

美

<

八

I

はすべて本社 今後の原稿をはじめ寄贈本、 へ送って下さい。

う激励を続けている とそればかりが心配で、

って変った病院の長い夜に耐えられるか、 での昼と夜が入れ替ったような生活からう

精神的に負け

燕

交換誌など

57

信心をすれば治るとねらわれる信心をしても亡妻には近づけぬ信心をしたら助かったかも知れぬ信心をしたら助かったかも知れぬ 神様へすがれば明日が軽信心と別の歴史を仰ぐ寺 信心をするにもやっぱり金が要り信心とレジャーが同居の寺もある 信心の老婆ヘローソク揺れつづ信心の怖さは医者を振り向かず 信心のまだとどかない空虚感 信心の深さをはかる金の 信心にうたがいのある曲 壺坂の谷信心が深くなる 信心の徳を先取りする願い信心に徹する母を曲げられ 石段の数に信心ためされる それなりに信心深い父の汗 ほどでもない信心をもてあそび 速する信心視野をせまくする へすがれば明日が軽くなる 1) n 82 X

鬼花鎮好翠恭眉好花滋幸小き

一光太水一梢雀

坂 形 水 信心深い母の祈りを待たされ

3

敏 踊

拾得物

載せてない棚から落ちる筈がな飽き性と本棚からも叱られる キッチンの棚には妻の知恵が乗る棚の上で四季をすごした花の種 一ぱいに供えお盆の亡父母に会 棚の布袋に春の ぬ男と一生添 Vi

棚造るだけに半日考える

区役所の棚にわたしの籍があ

ルフバッグの横着さ

(河井庸 佑 棚に神様乗って

つつれ

捨てきれず棚にもどした大掃除 本棚に住みつく紙魚で古書が好 制棚はい 棚はほこりかぶって皆達者 の花八十の母が替え で湯めぐりか老夫婦 棚上げにして議

棚をつる男はやがて本を買 本棚にアンネの日記二冊ある 憲法の棚がそうぞうしくなり始め ふるさとの棚にはわらべ唄がある 中流の本棚へそくり探しあう 古本屋の棚のほこりに意地 安全週間飯場の棚にいます 来阪の父其処此処に棚を吊り 棚にいろんな神を雑居させ があ

妊娠へ背伸びをさせぬ棚を吊る飾り棚くらしの余裕見せている 春夏秋冬色の見本が変る棚 棚の本君の思想は モーニング質屋の棚で眠りよし 棚の下で遺産のことに触れ の棚に眠っている仔猫 知れてい

形涼み健涼鬼涼水萬岳小失岳柳酔柳 水一ほ司一遊一客的人園名人杣々伸 右 栞 太人

千憲好み天恭酔糸白 万 子 祐郎ほ笑太々葉宗

客·黑川紫香·若柳潮花·高橋千万子·西 ・村田瓢太・野呂右近・竹中綾珠・正本水 北勝美・板尾岳人・横地雅風・中川滋雀 鬼遊・宮園みずほ・松本凉一・河井庸佑・子・江口度・藤田頂留子・香川酔々・高杉西川善紫・津守柳伸・上田翠光・岩本雀踊 神谷凡九郎·島居白宗·菊沢小松園· 尾栞·山本規不風·山本桐下·金井文秋 村田瓢太・野呂右近・竹中綾路北勝美・板尾岳人・横地雅風北勝美・板尾岳人・横地雅風

・宮園みずほ・松本凉一・河井

.

九月現 在

灯籠が揺れて名残りの灯が消える他人の子育てた誇りだけ残り里帰り錨おろしたように寝る とんぼ立つ浅い思いを変えるとき 墓掃除嫁と姑のいがみ解く

上地を買う 緑早三紫 之 助苗和吻

地 柳 追

.

児島与呂志

考えの的が外れて見る憂きめ包装紙お店自慢を絵が語る にた川柳会 なを越え 晴雪英鉄 月

を完きは知れたもんだともう一杯 行商の洩らした耳の長いこと 行商の洩らした耳の長いこと うさばらし風鈴むりに音を聞く お茶うけに何を煮よかと南瓜切る お茶うけに何を煮よかと南瓜切る またと値え 幸千ミ 一草コ 可保留



領書。締切毎月末着便まで。 かならず原稿用紙にペン書きで文字は 七字以内の句に、下三マスに雅号。 21行以内。

妥協したらしく二階の灯が消える 妥協した傷がときどき痛みだす どんぐり川柳会 史好報

大阪の祭を嫌う鰻・鱧 うな丼は牛丼ほどに脆くない 芸に生きる誇り妥協が許せない 妥協するつもり白紙のままで出し 料亭に席とってある妥協点

風渡る五月へ女身がまえる 腹いせに空缶一つ蹴っただけ 妥協まで何時までかかる倦怠期 妥協してこっそり外科の門たたく あっさりと妥協できるも年のせい

興奮のないもの同士日向ぼこ 妥協して今日はくちづけだけ許し 腹いせに女はすぐに荷をまとめ 妥協した裏でニンマリ鬼の顔 程遠い妥協はタバコばかり喫う 腹いせにチョッピリ女くすり飲む うなぎ食べ女社長は化粧する 光遊報 史柳 美乙女 千代三 万雅真勝儀吸 砂美

菜の花句会

平然と通り裏口とは見えず 草の根の雫を吸って父帰る 芸者頼めば三味線が要ります 故郷を旅人として通り抜け 海底の蛸の寝ざまは和尚め 通り抜けどっちの耳の蓋しよう 興奮はしていませんと興奮 通りゃんせ帰りは恐い鬼の か

凡九郎

老いざまの孤独は言わず露天風呂

大坂

キャニオン 形水報

百合子 竹 てまり

生田成川

ねぶるにはおしい造形飴細 海そこに見えてる旅の湯にひたり

T.

和弘花代友之子

面

湯どころで滝の飛沫が来るもよし 茶筅よくお湯の加減を知

っている

先妻の子供がしてる通うせんぼ 本を読む前から興奮しています 噫無情でるてる坊主から零

かごめかごめ可愛い鬼の子なら通す 生きていく雫を神様から貰う 興奮にカチワリ氷がとけてくる 母探す子は大声で泣くがよい 三尺の縄もたされて興奮す 海底の都は憂きか平家蟹

小松園

歯を抜くなんて悲しいなあ雨が降る新緑を縫って地を打つ若い雨 ビニー ピニー 五月の風へ姉より十歳長く生き 残された人生走るのはもうやめよう 紅葉柿の赤さに負けてい 京都塔の会 ルの便利さに人間負けてゆく ル栽培野菜の季節を取りあげる 杜的報 芳飛萬潮水 孝明美 求杜

穗 芽的 柳鎮岳薫 鬼 小酔 柳宏子 風

雀み柳鎮岳 踊ずは杣彦人

への字に結んで耐える社公共 ひたすらに頑張りぬいた晴れ間です 店先も晴れ間へ売り声活気づく 爪の先まるくなってる仲直り 雨上りいやな気持ちを虹が消し 晴れ間からこぼれる太陽拾り主婦 給料日ここ四、 便小僧の前で待ち呆けている男 オーエスケー川柳会 五日は晴れ間です

やっと晴れ間洗濯機うなりだす 蛙の子尻尾をつけたまま家出 純朴に恋の言葉を吐く 人並の努力で晴れ間に出会わな 病床で雀の声に知る晴れ間 カラオケに蛙も調子狂わされ 雨蛙揺れるはっ葉へ身を合す 実の時間が出来て帰って来 13

亜也子 一 一扇 夢

YFC会員募集・ 初心者歓迎

会費千円。 ▼本年二月から梅田阪急ファイブ九階・オレ ンジルームで開かれている川柳セミナー 「生々庵川柳行脚」の会員を募集している。 毎月第三火曜日の午後一時半から 初心者をおすすめください。

湯で髭を剃ってたのが来てみなそろい 湯のたぎる釜へ一杓水を差し

白渓子

宗教も地に墜つトラブルまた起

1)

あこれが平和茶室の湯がたぎり

トラブルの火元祇園の妓から

-59

登

晴れて来たらしいストロー飲みつくし 逢うてきた傘の雫が光ってる もう少し暮しの晴れ間ほしい妻 合唱に調子外れも居る蛙 頂点に立つ男です傘嫌い 六月の傘に喜びばかりある 柳化粧櫓 郎仙水生博

踏ん切りがつけば詩になるつゆ服買った理由肥ったせいにする 厄除けを守りに刻み肌に着け 寡婦の人相に易者の灯がゆれる ものすごい水着視線を引く浜辺 執念の席はしばらく空いたまま 鏡台もガタガタにして孫二人 ジャンボくじ当ったような総理の座 茹で卵ころりとむけて窓の風 生臭く生きて妬心を持ちつづけ 大永

もう許す目が一言を待っている 子育てを唯一筋にきて空し 庭師一筋無造作に石決める 信じきる幼い目には背けない 神の指すその一筋は歩けない ボンクラに見せて避けてる風当り 目を逸らす君との距離を見失い ふる里に向く一筋の逃げる道 の奥の戦火は消えぬ夏の雲 ル飲む女のツマミになる男 二男報 太茂津 凡九郎 としよ 太

ピー

ふり袖が紙風船を飛ばさせず

0 雨

きよる

故郷が一緒夜汽車の友となり 世の中を利口に渡る芸達者

柳わかやま

両の手で酌がれビールの価が上がり 目は既に自白黙秘の膝震う ビールあければ青春ほとば の目にまだ海がある朝の市 の目を嫌ってる車椅子 せぬ男を忘れ

弁解は止せ君の瞳を信じよう 目にあまる子でも親なら影を追う 芸一筋あほでは出来ぬあほになり 筋の涙信じた日の誤算 南海電鉄川柳会(大阪市)辻 圭水報 加寿子 寿美数 白光子

会

東大阪市立中央公民館

正午開場

出句と切

時半

新仏出来て念仏とぎれない 金婚の二人念仏習うてる 念仏もテープですます観光寺 念仏も知らぬ若さで先だたれ 念仏を善男善女の顔で聞く 云いすぎた言葉を悔いるお念仏 念仏でよける世間の風あたり 小松園

疳の虫無人の島へ行けばよい馴れぬ手でおしめを変える幼妻 婦警さん不馴れか道を教えかね野菜高不馴れな鍬を握る主婦 洋食の不馴れ皿ごと持ってかれ 懸命に不馴れへいどむ松葉杖 大念仏数珠ひたすらに数珠をくる 手術室念仏唱え鯉になる 綾

欲得を搦めて示談纒まらず 疳虫の子を持つ母の案じ顔 疳の虫仏様でも手に負えず 落選をダルマ片目で泣いてくれ 西尚 洛酔報 さゆり

> 第十 四 東大阪 市文化祭参 加

日 第八回 昭和五十五年十月十日 柳 (祭日

講 市民会館内 「川柳よもやま話

視聴覚教室

(近鉄永和駅すぐ

南

兼題及選者 番傘川柳本社·副幹事長 手 亀 高

なさけ 罠 永 Ш

弾 野村 太茂津 島 郁 帆 船

森中 恵美子

題 題(当日発表 中 (五十音順 綾

出席 各題優秀句に東大阪市長賞その 出句は出席者に限る 席題共各二句以内。

五百円也 (呈・大会句報

懇親会 . 東大阪 会場で受付 市川柳同市文化

東大阪市・東大阪市教育委員会東 大 阪 市 川 柳 同 好 会東 大 阪 市 文 化 連 盟

— 60 −

割カンにする二次会で皆小者 婆さんになりたく無くて紅を引く 婆ちゃんの耳は時々故障する 親の脛かじって総領無事で居る 嚙じられる脛は他人へ見せられず 向う脛へ才女の薙刀飛んでくる 自信あるきれいなすねでミニをはく 新婚は夢一杯のニュータウン 兎小屋もう見当らぬニュータウン ダムの底秘史のぞかせた水の青 夏の陽に燃える若さがうらやまし 不信任やぶをつついてへびを出し 妻そっと今日の破片を捨てて寝る 逃亡者夫婦になって帰国する 比呂志 真佐志 道洛笑弘酔喜秀 三十四 与呂志

義理果し背の空気が軽うなり 二次会へ妻の許しが要る男 南大阪川柳会

滋雀報

本蔭棒

じらされて泣かぬ女になりました じらす気はないがそちらがそうさせる ふんぎりのつかぬ自分にじれている いち早く尻尾を振っておく空気 空気銃持つと脳波が騒ぎ出し 峠茶屋うまい空気を聞きあきる 恒喜 好 風祐郎

新聞に予期せぬ記事が多すぎる 美頂酔柳 乙留 夕 杣 柳宏子

暖かい掌だった他人のまま別 どん底を知る人にある暖かさ

かい家族が視野に居る老後

左手でよかった怪我を慰める 何くわぬ顔で商売うそも混

さよ子

武助報

仙

予期せぬ人に出逢った虹の町

期通り鬼が後悔する民話

逃げて回る犯人に安全なとこはない 安全を信じた彼も男性で 人生のネジを毎日しめなおす ネジ巻いただけは動いている玩具 ネジ巻きにいって小遣いせびられる裾分けという路地うらの暖か味 泊 た暖 か 味

多伎の海凪いで初盆迎える日 終戦の日の思い出が嚙み合わずばれそうな嘘は冷たい汗をかく 思い出にお前は若いままでいる 一日の時計を追うて満ち足りる 駅降りてから思い出の道曲る 横顔に愛を打ちこむ少女の目 日の汗に明日を信じきり 川柳いずも

酔風生花酔峰

参観日派手に光った指の石 忘れ物大きな声が追いかける 灯心の如き追う気の恋心 鍵っ子のまぶた他人の愛憎む 雲を追う思いふるさと母のこと

きみえ

アルバムに思うあの時あんなこと 血と汗を犠牲に平和の鳩がとぶ 原爆の火傷に汗が吹きださぬ 盆帰省海は冷夏の波の音 妻や子に継ながる汗は拭うま 海岸のキャンプへ蟹が這うてくる 新盆に一人になった灯をともす 芙佐子 代仕男 軒太楼

80点の人と添

板垣 凡九郎

草丘報 多賀子 みのる 叮緑之助 耕 寿美子 朗 苗

前年のリストで贈るお中元 父の留守まず長男が風呂に入り 画心ゆさぶり夕日海へ落ち 夕陽背にあびて夜勤の靴重 鍵ッ子は夕日の中に母を待つ 夕日沈んで活気を出した夜の 焼けそうな夕日へ明日の夢綴る 波静か遠き夕日に艪押舟 夕日浴び釣れぬ漁船が錨上げ わかめ採り夕日に染むる漁夫一人 汗をかく事が取柄で恙なし 城北川柳会 族の数だけ親がいるだろう に勿体ないと言う亡母で 111 蝶

熱かんと酢だこが待ってる給料日 П

佳句 地 10 選 前月号から

だしぬけへ脳波が右往左往する玄関でその家の貌を見てしまう良心が逃がしてくれた小さい罪興亡 の 歴 史に 民の 血 は 流れ ーや鮎野日 芸り哀良々 にくれ 気れそのでは、良大を友達にして 0 の歴史に民の血は流れに秀で物価高知らず 4 りの夕食明日は給料 少し を利用され て独りっ子 0 大き 父で居 日 る 君久軒五道独 米太 子雄楼月子仙 鎮君 子仙水酔

弘生報 鬼 操 白富武加 光子子助 仙 民善波 遊 仙郎吉津雄栄

出張のパパは手ぶらで帰れない 習慣で靴下パンツ左から 虫めがね手持無沙汰な休刊 老人の集いの席も同じ場所 三歳児足元揃えている習慣 商売の愛想笑いも性となり グリーン車に乗る習慣はやめ給え 足音で愛犬メリーは聞き分ける

星炉喜公ふ午

習慣はマンガを読んで釣りに凝り

ボイ捨ての習慣に泣く観光地

肩すかし見事金星射とめたり うますぎる話の最後に肩すかし 肩すかし惚れた弱味で怒れない ゆとりある愛ですくすく子が育ち 老いの坂ゆとる心が詩を習う 景色みるゆとりが出来た下り 柳ささやま 河原みのる報 三十四 テルミ 満津子 道

買物へつききりの世辞が客逃がし 真シ中の舞台で鼓軽う打つ まん中の椅子停年も平のまま 真ン中で撮られ総理の顔になる 真ン中と云う倖なくじを引く つききりの母の指輪がよく光り つききって教わる祭りの笛太鼓 つききりのお世辞に耳がほてり出 つききりの甘え女房も四十過ぎ ひか平

> 縫いぐるみ脱げば弱々し 堺川柳会 い男 内

風鈴に風のスタミナよき音色

大笑報 康

虫しきり忘れられない人があり 衣紋掛脱ぎっぱなしの娘の浴衣

じんわりと日本蝕ばむ白い粉 中年の恋はグラスの底で逢う ビール飲む女にはない喉仏

> ところ ٢

八尾市商工会議所三階大ホール 近鉄大阪線八尾駅下車南三百米

汗摑むように帽子を脱いでいる 気がかりな朝酒があり父達者 脱ぎ捨てたズボンとぐろを巻いてい 縁日の暗い灯で鳴く篭の虫 マンネリになって中毒かも知れぬ いる 与呂志 美乙女 柳宏子 凡九郎

乾杯のグラスに父の荷がおりる 前向きの姿勢で女脱ぎはじめ 古文書の大事なとこを虫が食い 社会悪にすっかり中毒症になる 慶之助 備後桜 左久良

想い出を追うとビールの泡が消え 祖母は着せママは脱がせて子を育て 一匹の虫お喋りをだまらせる

宏酔

パチンコに行かんと一日終らない 子が病んでセミもトンボも遠ざける これ以上脱ぐものがない汗を拭き 生樽を囲む今夜のホームバー 柳後楽(岡山市) 井上柳五 たつお 月 笑 疵

珠山子

柳五郎 たけ

手拍子に乗って音痴が唄い出 手拍子を啞然とさせた音痴ぶり ご機嫌は直ったらしい手を叩き

大家族色それぞれの箸で分け

スタミナに負けて徹夜の碁の乱れ スタミナが土用鰻に引きずられ 敗因をスタミナだけのせいにして スタミナのたぎる同士がどっと立ち アルバムの真ン中父のない不満

ゆう也

エキオ

第27回 八尾 市 文化祭

ŧ 昭和55年10月12日(日)正午開場 市 民)|| 柳大 会

費 八尾市役所前 五〇〇円

柳 会 話

11 窓

岩本雀踊子氏

村

好郎氏

点

はがき

小松原爽介氏 好啓氏 藻介氏

中田たつお氏 栞氏

五十音順)

(兼題とも各題二句以内

懇親宴

締 席

切 題

午後一時三〇分

題

希望者のみ当日受付

催 八尾市

È

八尾市立公民館 八尾市教育委員会

後

拨

八尾菜の花句会

62

燃え尽きる時かローソク音を立て 横道に燃えてる鬼火にある魔力 能面の燃えるひとみに気遅れる 燃え尽きた女に深い傷がある 燃えている二人へ石が飛んでくる 老いらくの恋で燃えたつものがたり 堕ちよ堕ちよと札束が頬を撫で 故郷の山河昔のままでよし 然えている男で軽い靴をはく しずかにしずかにマッチ棒燃えつきる 燃えた日の遠くつばめの巣をみてる 草燃えて石の仏は石のまま フレーキがかかり燃えたまま別れ 燃えつきた女の軽い命かな まだ母は達者ですよと里だより 素人の眼にだらしないプロがいる 底辺に耐えて奢らぬ箸があり 転勤へまた溜息をつく女房 溜息をつけば子供が不安がり 溜息にダメな男と見離され 溜息と共に家計簿閉じられる お互に昔の傷には触れず飲み 裏街に昔気質の人が住み 城下町昔の唄がよく似合い ひと昔語り終って無口なり Mid さしてやっぱり気になる後始末 恐えに燃え添うた二人が家裁出る **添えるもの抱いてる瞳だなと思う** 満腹の箸は押し戴いて置き 駒つなぎ川柳会(大阪市) い馴れた箸 里

柳宏子

優しさの影で力が出番待つ 苺つぶす女の嘘が美しい 清貧の義父に仕えて美しく

てまり

規不風 千代三

小路報

昌恒幽

佐加恵

アキラ けんじ 美乙女 凡九郎 雀踊子 路

> 葱きざむ朝の素顔が美し 燃え尽きた女ごころが灰の 女の余白に燃えている焦り 三井ヶ丘川柳会 V 高田

> > 小松園 代

鮫虎狼

風

亜右

方成近途念生夫風

美しい夜景に夜桜映えている 花びらを風にまかせて春走る 脱ぎすてた昨日の靴に合す足 せいいっぱい生きて昨日が今日となる 昨日のようにケロッとしていて憎めない 便箋の余白にひそむ母の声 美しい心が掃いてボランティ 裏切りの中の美学を探してる 握力の違い現場に生きている 一人一人の力まとめるタクト持つ 節穴に春は逆さにやってくる 角出した昨日を悔いる妻といる 洋雅形古 茶洋水

昨日を悔んで明日の種をまく昨日に何があろうと夜は明ける 通り抜け附和雷同の顔ばかり 男と女へ花咲き花散り面白や 一方宣言好きなら力で押し通 からっぽの宝石箱に虹ひとつ 美しい嘘と病人知っている 美しいもの美しくみる素直な目 七彩にアルバム埋める初夏の旅 花だより駅毎拾っていく鈍行 満津子 柳宏子 三千子

の日はせめてエプロンはずさねば 河野 君子報 燕 小松園

勝山双葉川柳句会

文化祭参加

第30 岸和田

市民

111

会 日 話 時 岸和田市民会館地下会議室 昭和55年10月19日 川柳塔社主幹 一時開場……十 (日曜 七時まで

魔 高 良 花 代 子 梢 選 選 選

出

7

選 庵

17

江留美 亜

鈍

席題二題

各題秀句 垂井千寿子・高橋千万子

呈 締

切

十四時(出句は出席者に限り

ŧ

市長杯ほか

選

会

五〇〇円(句集代

高橋操子内 岸和田市土生町一九八九一八 〇七二四22〇〇四九 岸和 田川柳会

-63 -

物置で机大きなあくびする 熱の子へエプロンのまま添寝する 食卓が机で家族に対話あり 子育てもすんでちょっぴりお洒落する 得心のいかぬ返事に又迷い 男にも近頃エプロン似合い出し 夏休み将棋の腕の上った子 夫より話の分る子に育ち 夏休み二人の子供をもてあまし エプロンの似合う娘にして嫁にやり 育ちの良さ崩さぬ膝へ見せている くよくよはよそう大きな夏の雲 得心はしても踏めない人の道 待合へ招き得心しかと決め 得心がいって親子の愛もどり 腹割って話せばやっと得心し 得心をしたので損は諦める 得心がいけば案外近い仲 はばからずエプロンでゆく参観日 台所へ妻はエプロンしめ直し 子の机プライバシーを主張する ご自慢の机でマンガばかり 古机心の傷もきざまれて 容赦しない夏の日ざしを逃げ 手を握り得心したと目で知らせ 得心がいって膝を組み替える 柄で得心させて酒にする 本語を得心さすにひと苦労 ルの机で孤独に耐えている 柳ウイロー社 前山 北海 喜美代 キミエ いくの F- H 節 君

草カロ

・駄ばきの散歩に連れの蝶も居て

戦友の計を戦友が告げに来る 嘘だとは知りつつ妻の聞き上手

青空を見せてと鯉が跳

ねている

気短か得心顔でする返事 得心がついたつもりが又迷 得心の行くまで考えさせてくれ 得心の出来ぬ警句で口 トライカー得心いかず明日も又 Vi 松風報 紅 万里歩

それなりに自己満足をして女 切り口上電話の向うはどんな顔 人妻の夏衣藍染め藍映えて マネキンは二ヵ月早い夏を着る 献立も涼しく夏を盛り合わせ 退院の土踏める日ぞ衣更え 来客もなく生花の寂しそう 步坊

風呂敷を鞄がわりの立志伝

集金が美人の嘘にひっかかり 集金へ小銭夫が払わされ 集金が来てアリバイが崩れか 新岡回 天子報

テレビ料理あれだけ使えばうまい筈 シナリオのように舞う人我も人 妥協せぬ声だんだんと喧嘩ごし 退院も真近し臍の垢をとる 空瓶の数が血圧下げさせず がひがさに変る梅雨のあけ 虹川柳倶楽部 新 一素四紫久仁 竿石郎浪於

傘

しても気付かぬ四月馬鹿 恒松 早紅報 回 至 五 天 汀 苗

青や赤みんな月賦の屋根つづく

川柳塔まつえ句会

34

堺市民 川柳 大会

ところ 3 堺市博物館 昭和55年10月 堺市百舌鳥夕雲町二丁 会議室 26

٢

和線百舌鳥駅西 仁徳御陵正 ひろば 川柳塔社編集長橘 住田 英比古

rái

風

題 讃

博物館 市

中田

たつ

お

選

西田

宏子

選 選

まつり 墳 磯野 尾 頭 さかむ 介 7 選 選 選

地

題

各題三句 吐 投句 拝辞 . 切

時

半・秀句呈賞・会費五〇〇円

記念品・作品

化 観 協 会

堺市堀上緑町二丁九 〇七二二十七八、四七 会

協 主

連

絡先

謎がなくなると困る歴史学者 寝つかぬ子もう謎ナゾの種が 謎めいて言葉の端にある焦 謎のまま灰色の雲消えてゆく 少し謎あって長続きする夫婦 謎ひとつ解き新しい謎を持ち 青い海静と動とにある変化 青い目が片言で聞く城下町 育蚊張もたたんだままにある冷夏 自然破壊地球の青さ薄くなり ほのかに友を焼 の灯も消え街も寝る仕度

独立の夢がふくらむ出前もち 威勢よく出 前が届く新世帯 野球のことでない飲み手

切 n 舞鶴耕

登美也 孤呂二 三 軒 寿美和 楼子

美童都る

魂 はこんな辺鄙

出前する 所田軒

PT

香の渦に一 わかあゆ川柳会

早ぬ耕み水可保 るの保留 苗を草る煙留 登美也

癖っない若竹天を高く指し おが事は棚に他人の癖を真似 子守する母責められる孫の癖 肩書の癖が出てくる電話口 電気が高いではないがさりとて好き嫌いではないがさりとて好きで好きでが表の孫は女だけ 好き嫌いではないがさりとて好きで好き嫌いない子ブランコ高くこく 好き嫌いする母子である場のの孫は女だけ がき嫌いする時間い合せてくる七回忌 ではないがさりとて好きでからまかが家の孫は女だけ がき嫌いする時間で好きでかられる席があり がきがいまっ泰平の子がひよわ がきでかむ酒も嫌いな席があり がきがとて好き嫌いな席があり

多賀 煩悩児

雅号ぶっちゃけばなし

192

侃は本名で「す

なお」と読みます。

かんりゅうどう

自分の名が好きで、俳句や川流、雑文などには、すいから一字を選んで名付けたと聞いていますが、私は、 生活を私流の川柳とともにと思い川雑下関支部に入 侃流の号で、 和二十 本名を使っていました。 -年の暮に職業軍人から国鉄に就 親父は長男の名というので、 作句にいそしんで参りました。 論語の中 それ すべ

侃流洞

III

から間もなく、

長老連から会長にふさわしくと「洞」をつけられ

下関川柳会の会長を仰せつかるに及ん

石

会長を交替した後も、「侃流洞」 長老連のご厚意と親父の願いを大切に、 を愛用しています。

LI

か わ

会社員・六十三歳

七人の敵と対したでエンゼルの鰭だけ動目ぐすりを言い 動いている洋

東大阪川柳同好会 斎藤三 でありにやれやれ前の席が空くドヤ街の喧嘩は野次が大きくし様に釘打ってせっとする同行二人札場についた岩清水年寄りにやれやれやれ前の席が空くドヤ街の喧嘩は野次が大きくし様に釘打ってを対りピアノ流れる露路の奥ジングルがダブルになる目行つ洋間からながめる古都のた回りでれやれの齢で硯が凹んでるよろこびの電話笑顔もありました心機一転男は明日を考えるこんどは本気顔をあげたら髭がないが横一転男は明日を考えるよろこびの電話笑顔が感じられず間からながめる古都のたたずまいを差すバランスで口動く 指揮棒にだまされ易き人の渦 ウインドーのミンク静かに売れ残り 汗水の話 子等には興味なし は待つ洋間 斎藤二十 間 V Vi Va 酔恭翠慶鎮喜雀 一踊度 々太公三彦郎子 千良益喜か誠柳善弥三 代 子京孝風を一伸紫人四 四白清清輝鈴芳敏報 ____ 湖道 白清清輝鈴芳敏 タケ 汀夢泉水江枝明ノ 風子

高魂も汗には叶わず真裸 をの絵は木枯らし吹いてぬむらせる をの絵は木枯らし吹いてぬむらせる をの絵は木枯らし吹いてぬむらせる とい違いもあって人生おもしろし が水の話 子等には興味なし これからが本番二次会の先に立ちたれからの仕上げ静かに喫いつける。 夜を見守ら 白 美汀軒緑独 紫 楼助仙 はるみ

集・ 募

JII 水 ★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。 ★川柳塔欄の投句は本社同 泣きごと 煙 柳 + 題 二月号発 束 塔 吟 抄 (3句 各題5句以 10 10 旬 旬 表 中 橘 菊 時 林 末 西 人に限ります 牛 董 1 春 松 17 量 庵 灯 風

選 選 選

庫

文 選 選 選

水川 課 字は楷書で新かなづかいにしてください ★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内 点 煙 柳 樟 題 運 帖 抄 塔 吟 月 号 10 各題5句以 3句 10 句 発 句 表 菊 中 橘 Ш 月月 内 浦 本 生 日 勝 1 薫 不 松園 締 12 切 庙 晴 風

10月の常任理事会は2日5時から

風

選 選 選

昭昭和和 **一** 半 〒542 五五年年 印発編 分分 普通預金口座番号、 刷行集 大阪市 電話 大阪市南区鰻谷中之町二〇番 行所 五五年年 振替口座 大阪 所人兼 四 大阪 JII 藤 五 柳 原島 中少 百 童 蓬 前 円 Ė. 円 日発行 九八五番 送 共 社郎

55年度二賞発表句会

会席

15日

一緒切

選

選

選

兼表

会 日 場時

金十

後

八時

費題

題彰

路郎賞 11 柳塔

月 七 日 話 火 堺 £63

三百円 ゆとり ★投句だけ 巻き返し 日発表 の方は切手百円封

賞 771 新線 西川菊橘 中 各題 堀 尾村沢高 島 3 三句以内厳守 HT 9 生 好小薰 車 3 10 栞郎園風 17

★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区鰻谷中之町20

無

Ш 柳

選選選選

塔

5

雇

7 地

社

真 相 有名税 家 色 元

原稿は本社へ

11月の兼題

お買物は 4都を結ぶ 大 丸



大阪・東京

京都・神戸

定

送料

が本職 いておら 111 福永清造先 柳寄席" ンペン草に慕 れるように、 0 ンペン草 生が拙著、 W. ない男 の書評に

消さねばならなくなっ んなとこで悪名を売 よいよ最 ン草パ 後に残 まで てき

葉子

Ī

+

1

たまわ 叛しさとも悲しとも ン草』 ただきます。 ない今の気持ちであ あげ ました。 まで水い に幕を降ろさせて た皆様に心 ″拙草 あり 11 t の温情によるもの **や配先生** それと読者の皆 H 和 けられたの M め幹部

なんとか

#

で足

和

集の座おりる

訪れは光の変化から 影も涼しげになり、 私のい花 き誇 ります 花花 ます さみしげな花、 秋 あり、 胸 堂筋を歩く人たち しげ れい えるも あちこち なものがな花、 から始ま かわめた がおは 秋のの 非い 本誌をさらに発展

も本

のために

この

ささす

ため

ではないかともお

本の

同人"

想し

n

1

によるもので厚くお礼申 あげます 糖尿病ごとき 背様の

t まち より ができるというもの 社である。 ★人材にこと欠かぬ川 細 ない 悔いも残らない 雑誌の出ることは 座を降りること かならず今まで ぼくも 安心 柳塔

から、

生々庵先生の

一:夫

けてきた今 として、 よい 加格 于 Said Marie 3 それに病名の たか からス ささか 仕事を誰かにやってもら t: h 4 4 れも初 の名を消す 西尾栞氏や大 分号はなんとしてもや トゲ 85 いただい グ入院す 体 また高橋操子 っことが 柳 0 塔か たが るよう 坂形水氏 てしま カ でき 3

進 こ重

咨

であ

★500円から50,000円まで各種ございます 先様にお望みの品をお選びいただける 手軽で便利なご贈答品です ご進物には 近鉄の商品券をどうそ

アヘノ店 (06:624-1111 上本司店(06/779-1231 / 奈良店(0742)33-1111

襲っ 後記を に痛 たく参っ 帯状湿疹とそ 日も早くご恩返えしをし li がとうございま 示に従 てきた。 + 0 へまで il 胸 元気をとり この二 てしま から背 キリ なさ れに ただい れに 枚半ほど 2 しとア 神 かよう かい 1: 数 H

正しくお使いください。会くわしくは医師。 薬剤師、薬局、薬店にご相談ください 武田泰品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27 が▼せ 10月は青春の ます 寄 って来るよう 秋び 0 1 1 を

老

肉体疲労時のVB、補給に

乳期のビタミンBi補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・

肩こりの緩和、脚気、会説明書をよく読んで

葉裏が陽を浴

感がササ

川岸

0

+



若さの時代かな

サントリービール 純生

製造・販売 サントリー株式会社

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の 静かな環境にある大和文華館 は 日本建築の特色に近代美 を生かした美術の殿堂です 収蔵品も日本・中国を中心に 国宝・重要文化財を含む 有 数のコレクションです 観覧時間…10時~17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄

